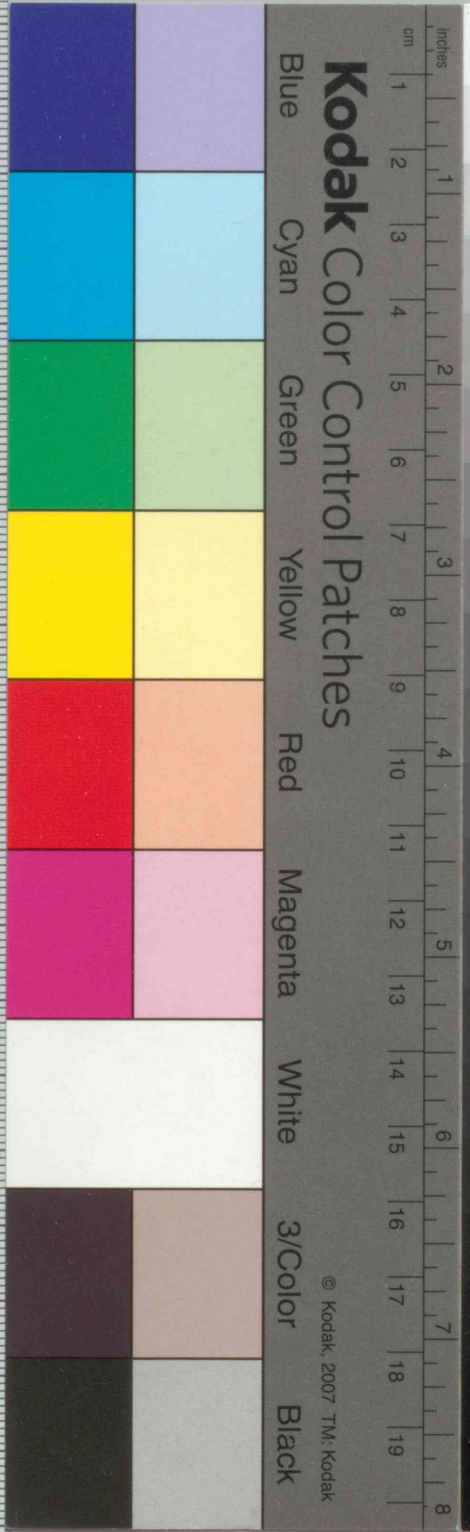


女子新國文 卷一

教科書文庫
4
810
42-1923
2000065461

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

Inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

42187

教科書文庫

4
810
42-1923
20000
65461

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22

教科書文庫
4
810
42-1923
2000065461



山
野
景

資料室

46
810
大12

日四十二月二十年二十正大

濟定檢省部文

文學博士 芳賀矢一編

女子新國文

東京

合資
會社

富山房發兌



清金工子

女子新國文 卷一

目次

一	天照大神	一
二	櫻	四
	夕やけ	
三	春の草	九
四	我が國の家庭(自修文)	一一
五	父の許へ	一六
六	大和の孝子と芭蕉翁	二〇
七	都會と田舎の間	二六

広島大学図書

2000065461



八	渡舟	二九
九	春の暮	三三
一〇	菜の花と小娘(自修文)	三四
一一	一抹の雲	四二
一二	眞の人	四七
一三	小木曾つぎ女	五三
一四	慈愛	五七
一五	舊師に贈る	六二
一六	旅人となりて	六六
一七	紅花と白百合	六九
一八	花の傳説(自修文)	七三
一九	海王國の婦人	七六

二〇	汝の母より	八〇
二一	花えらみ	八六
二二	須磨日記	九三
二三	夕立	九八
二四	かんにん(自修文)	一〇三
二五	ピエールとマリブランその一	一〇五
二六	ピエールとマリブランその二	一〇九
二七	祖先	一一三
二八	天長節	一二五
二九	元暴風警報の利用(自修文)	一二八
三〇	大阪	一三二
三一	鳥の美	一三〇

青い月夜

三 荻山直女下婢の過失を救ふ……………一七

三 春夏秋冬……………一四

三 一年の折々(自修文)……………一四

三 愛國婦人會……………一四八

三 明治天皇の御遺物を拜すその一……………一五三

三 明治天皇の御遺物を拜すその二……………一五九

三 明治神宮に詣でて……………一七

目次終

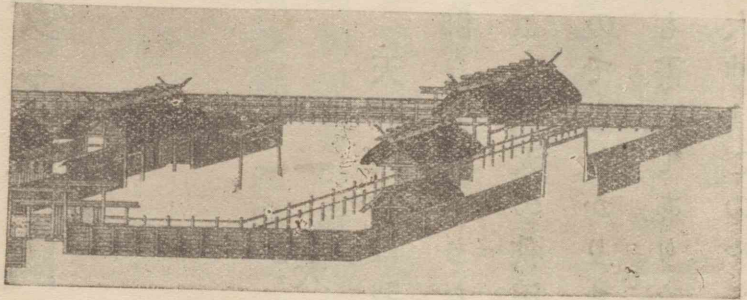
女子新國文卷一

一 天照大神

卒先

天照大神は我が皇室の御祖先であらせられます。高貴の御身分でありながら、卒先して農事をもおつとめになつたことは、天の狹田長田を以て御田とし給ふ。と古史に記したのでもわかります。又神衣を織りつゝ齋服殿にまします。とも書いてありますから、機もお織りになつたのであります。大神はこのやうに御勤勉なお方でありました。

所業
酔ひしれて

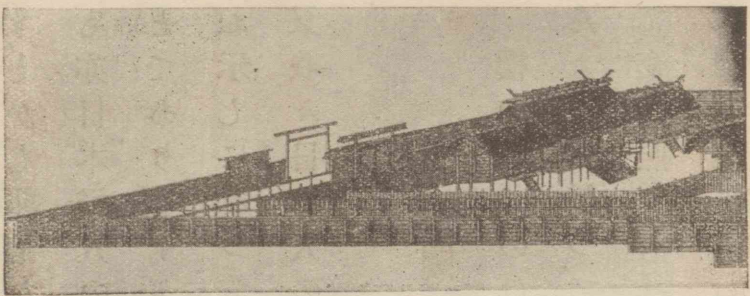


(一のそ) 宮 神 大 勢 伊

大神の御弟に素戔嗚尊すさのおみといふ神様が
ございました。常に大神の農事を妨げて、
いろ／＼な亂暴な所業をなさいました
が、大神はお咎めになりません。酔ひしれ
てなす業ならん。など仰せられて、そのま
まにしてお置きになりました。大神はか
やうな柔和なお方でございました。
その後素戔嗚尊が自分の治むべき國
へは行かず、高天原へ上つて來るといふ
ことをお聞きになりました。大神は、彼我
が國を奪はんとする心あるか。と仰せら

みづら
裳
ゆぎ

理想



(二のそ) 宮 神 大 勢 伊

れて、その時御髪を髻みづらに結び、御裳ゆぎをまと
うて袴にし、背には五百本入、千本入の鞆たもと
を負ひ、弓はずを振立て、劔の柄を取りし
ばつて、聲高らかに、「何故に上り來るか。」と
お尋ねになりました。日頃柔和温順にお
はします大神も、この度こそは國家の大
事と思し召したのでありませう。
勤勉で平和な生活を營むことが日本
人の古代からの理想であります。温良で
人の非を咎めず、慈悲の徳海よりも廣い
のは、日本婦人の美點といはれて居りま

申すも畏し
典型

す。しかし非常な場合に當つては、身を棄てて難に殉ずるの
も亦日本婦人の意氣と認められて居ります。申すも畏いこ
とであります。皇祖天照大神は、身親ら日本女子の典型を
お示しになつて居るのであります。日本女子の典型のみか、
又我々日本人の理想をお示しになつて居るのであります。

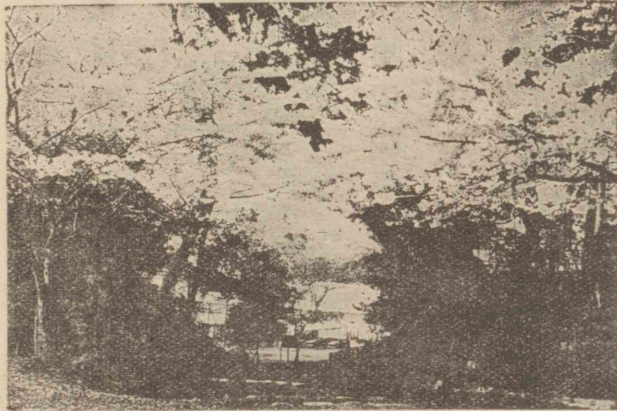
二 櫻

〔一〕照りもせず
曇りもはてぬ
春の夜の、お
ぼろ月夜にし
くものぞな
き。〔新古今
集〕大江千里
ふさはしい

櫻の咲くのは春の末である。春の日本は水蒸氣が多い。ど
んよりと曇つて、寒くもなく、暑くもない日和を花曇といつ
て、夜は照りもせず、曇りもせぬおぼろ月夜、雲霞とまがふ花
には最もふさはしい景色である。そよ／＼と面を吹くや春

はぐくむ

〔一〕江戸の國學
者。明和六年
〔二〕四二九年
歿。年七十三。



花の上の野

といつた。春の日は永い。

風。春の特色はどこまでもものんびりとした心持にあつて、き
りつめたやうなはげしさ、きびし
さの少しもないところにある。櫻
はちやうどこの時の氣候にはぐ
くまれて咲出でる花である。際立
つた特色のないところが、即ちそ
の特色である。賀茂眞淵は

うらく／＼とのどけき

春のこゝろよりにほひ

出でたる山ざくら花

(一)平安時代の歌人紀友則の作。櫻の花の散るをよめる。と題して、古今集の部に載す。

久方の光のどけき春の日に

しづ心なく花の散るらん

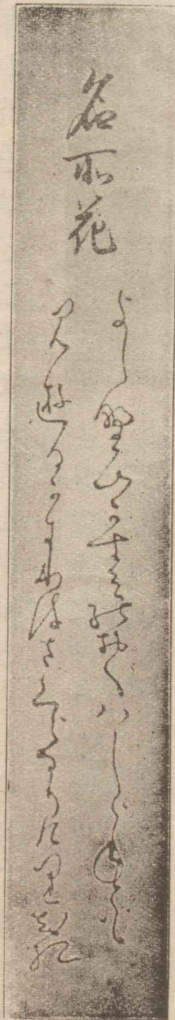
櫻は永陽の日に最もふさはしい花である。ここに大宮人のゆつたりとした優美な様子なども想ひ浮べられる。

もゝしきの大宮人はいとまあれや

櫻かざしてけふもくらしつ

牛車の歩みおそく花見て歸るたそがれの景さながらの繪卷物である。

(二)奈良時代の歌人山部赤人の作。新古今集の部に載す。



蹟筆紀知田八

(一)歌人八田知紀の歌。

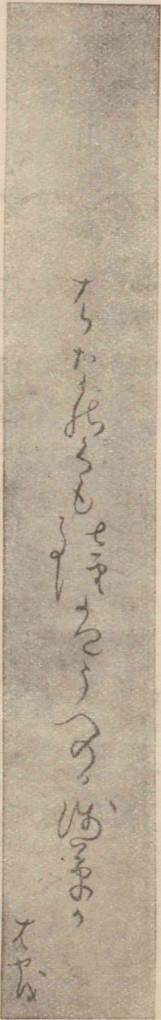
よし野山かすみの奥は知らねども

見ゆるかぎりはさくらなりけり

これは満山櫻の雲に包まれた吉野山の風景を詠んだのである。

はなのくも鐘は上野か淺草か

(二)俳人松尾芭蕉の句。



蹟筆蕉芭尾松:

これは大都會の櫻の花に蔽はれた光景である。櫻は牡丹や薔薇のやうに花瓣を愛賞する花ではなくして、木として愛賞する花である。否多くの木を集めて、人はたゞ花の中に在

つて愛賞する花である。下に見て愛賞する花ではなくして、上にながめて愛賞する花である。春風四月、日本人はすべて花の中の人となるのである。

夕やけ

野口雨情

山のふもこの

雲雀さへづる

遠方は、

遠方の

雲雀さへづる

山のふもこの

あを野原、

大空は、

聲ははるかに

夕やけ小やけの

ゆふ暮の

日が暮れて、

空はおぼろに

櫻は真赤に

花ぐもりに

皆やけた。――別後――

三 春の草

三木露風

一

萌えよ、萌えよ、春の草。

生ひよ、生ひよ、野邊の草。

あたらしき夢をはぐくみて、

春のいのちをのばせかし。

二

ながき眠の冬の土、

いつしか覺めてよみがへり、

芽をふく千草八千ぐさの

生の力

生の力の不思議さよ。

三

小川の水はぬるみたり、
日は晴れ空は薄がすみ、
つくみや、ひわや、鶯や、
さやかにあそぶ彌生月。

さやか

四

崩えよ、崩えよ、春の草。
生ひよ、生ひよ、野邊の草。
緑のしごねをしきつらね、
若きいのちを飾れかし。

—青き樹かげ—

美德
徳。うつくしい道

日本の家庭
云々
日本の家庭だ
けに、他は
りすぐれた有
様。

自修文

四

我が國の家庭

小さい兄や姉が、弟や妹を背負つて路端に遊んでゐるのは、我が國ではどこへ行つても見受ける事であるが、西洋では決して見られない。それを始めて見た或外國人が、

「何といふかはいらしい様子であらう。ここに日本の美しい國風が見える。」

と言つて感心したさうである。すなほに親の言付を守るのは、日本の子供の美德である。兄や姉が自分よりも小さい弟や妹をかはいがつて世話をするのも、日本の子供の美德である。世話になつた弟や妹が、兄や姉を大切にすることも、日本の家庭の特色である。この西洋人は、くはしくは我が國の家庭の内部を知らなかつたのであらうが、路端の子供を見て、我が家庭の美德「父母ニ孝」「兄

一端 かたはし。
東西 東洋と西洋、即ち世界中の意。

七夜 子が生まれてから七日目。
因む ひんがし、よる。かたどる。

命名する 名をつける。
産土神 郷土の神。

七五三の祝 男子の三歳と女子の七歳と三歳の十一月十日に十五日に行ふ祝。

弟ニ友の一端を認め得たのである。父母の子を愛する情は東西共に變りはないが、日本の家庭では殊に子供を大切にす。家の貧富貴賤によつて、生活の上にはそれ／＼の差別があつても、一體の風習は子供を大切にす。子供は父母の寶といふのみでなく、家の寶として尊重される。子が生まれた時の父母の心は、家の後繼が出来たのを喜び、家の益繁昌して行くのを祝ふのである。親族も朋友も皆同じ心で祝賀するのである。七夜までの中に名を附ける。行末はりつばな人になつて御國の爲にもなれ」と、祖先の名に因んだり、めでたい語などを選んで命名する。三十二三日日には産土神にお宮參をして、誕生した事をお知らせする。三つ、五つ、七つと段々成長すれば、七五三の祝といつて、その年々の十一月にお宮に參詣する風習もある。男の子の袴着の祝、女の子の帯の祝、父母はひたすらそ

袴着 男子の五歳、七歳の時、始めて袴を着ける時の儀式。
帯の祝 女子の三歳、五歳、七歳の時、始めて帯をつける時の儀式。
ひたすら 一心に。
傾ける 十分による。こびをつくす。

知友 ともだち。



の子の成長を楽しむのである。三月三日の雛祭は女の子の節供、五月五日の端午は男の子の節供、一家中の歡喜は子供等の爲に傾けられる。美しい雛人形、勇ましい鯉のぼり、かういふ楽しい日は年々に繰返される。

のである。盆やお歳暮の贈物にも、父母は子供等を喜ばせようと苦心し、親類知友からも、お子様へと心をこめた品物を贈る。我が國の都市ほど、おもちゃ屋の多い所はないといふのも、小さい國民をかはいがる國風の盛なことを證明するのである。我が國の家庭には、お父さんもお母さんもお祖父さんもお祖母さんもいらつしやる。日本の子供は父母の慈愛の外に、祖父や

老を慰める
 自分も年よつたの忘れたるころぶつ
 系圖
 祖先のつづきを書いたもの
 別家
 或は家族から分れて、獨り分家した家といふ
 (一)人の子たる者は父母を我が家の神とも我が身に神ともあふないつて大切にする切にせよとの大いふこと
 (二)國學の大家。伊勢松坂の人。享和元年(一八一一年)歿。年七十二。
 大人
 學徳の高い人をたつとんていふ稱

祖母の愛をも受ける。祖父や祖母は孫をいつくしんで老を慰める。家の中には神棚があり、佛壇があつて、先祖の位牌をまつてある。我が國の家は先祖からの家で、先祖と一緒に住んで居つて、だん／＼と子孫に傳はつて行くのである。家には家の系圖もあり、先祖から傳はつた品物もある。新しい家や別家した家には、さういふものがないところもあるが、本家にさかのぼり、源を正せば、皆それがある。家には家の紋もある。

ちゝはゝは我が家の神我が神と
 心つくしていつけ人の子

と本居宣長大人は歌はれた。父母は子等を家の寶と思ひ、子等は父母を家の神とあがめるのが、我が國古來の道である。親の親の世から傳へて來た道である。親しい懐かしい親愛の情に、貴い有難い敬愛の情が湧いて、父母に對しては神に對するやうなつゝ、

あがめる
 たつとぶ
 つゝまじや
 か
 つゝしみ深い
 意
 對等
 上下なく同等であること
 先祖と同居
 家の内には神棚あり佛壇ないふ

樂園
 たのしいばし
 いた。天國。パラ
 ダイスといふ
 英語を譯した
 もの。パラ
 イスには神
 天使と一緒
 住んで居ら
 るといふ。
 るといふ。

ましやかな心持になるのである。それ故、言語動作にもそれが表れて來る。外國の家庭では親子、夫婦、兄弟、姉妹の間の言葉遣はすべて對等であるが、家の神と仕へ奉る父母に對しての言語は、固より別でなければならぬ。先祖と同居して居る我が國の家庭では、目上に對する言語と、目下に對する言語に明らかな差別がある。親代りに世話をしいたはつて下さる兄弟に對しても、敬語を使はなければならぬ。兄弟はあくまで幼少な弟妹を憐み、弟妹はどこまでも兄弟を目上の人とあがめ、兄弟仲よくして父母に仕へ、父母の心を慰めて、ここに美しい家庭が成立するのである。父母ニ孝ニ、兄弟ニ友ニ、夫婦相和スる家庭が存立するのである。

西洋人は「日本は子供の樂園である。」と言つて居る。日本は子供をかはいがる國である。と西洋の讀本にも書いてある。我等がこの國に生まれたのは、我等の幸である。

膝下

五 父の許へ

一筆申す今も父上様の御誕生日なれば
 いつもよりも早起して顔を洗ひ髪も結直し
 故郷の空はるかに仰ぎし心の中には祝ひ中
 去来まゝは膝下に居り皆様と一緒
 に祝ひ中と云が今年はその事のかなはぬを
 心苦しく存じても學問は身には止むを
 得ぬ事とあきらめ居る
 かく御側を離れ居るは尚更におかしく

身にこたへ

(致)

ふかす

居るかの思

お恩のほごしく身にこたへに一夜は
 所寫真取出して西目にかゝる樂々に致し
 朝食後取出して今頃は宅のあの交に
 出すわりなされ煙管をあのやうにして煙草
 のふかすおぼすなさんだと思ひますとせう飯の
 後に今頃ははやお休みなされいかお思ひ
 出でなすつか我が身も御側に居るの思致ひ
 可愛だち多くは西親のそらひ居るは
 少く私に始終うやまれ居りしかくうら
 やまうにつけても益々うらやましく勉強

(機嫌)

たらちねの

(承)

しつと居るうちにも、父郷里の事思ひいた
しつと河父と様も、母と様も、西機嫌よく
令せらるゝと、何となく心丈夫になり、
勉強するにも張合が出来、何卒よく成績を
取り、一言よく出来たとおほめにあがり、夜と
勇みまゝ、その程も修身の時に先生より
明治天皇の御勅

たらちねのみ親のを、あら玉の
と、うまに、かに、そ、みける
と、子を、遊り、おも、はず、落涙、致、ひ、の、涙、は

息災

神かけて

(無沙汰)

何となく時候も不順に、西夜は精く、西養生
おぼ、西息災、そ、く、ま、も、今、夕、の、西祝
中、ぞ、り、ら、れ、や、う、に、と、神、か、け、く、祈、居、ひ
今、夕、夜、分、に、認、む、若、の、と、る、餘、り、の、西、な
つ、の、さ、に、課、業、が、す、む、と、す、ぐ、書、き、つ、け
取、り、あ、ず、西、祝、の、詞、の、み、申、出、か、り、こ

月日

花子より

河父と様、西許に

な、ほ、く、の、な、は、取、急、ぎ、い、ま、も、母、と、様、は、め、皆、様
へ、は、西、無、沙、汰、致、ひ、づ、れ、の、内、に、又、中、と、な、く、い

六 大和の孝子と芭蕉翁 吉岡郷甫

先だつ

昔大和國高市郡武内村に貧しい百姓がありました。老いて妻に先だたれ、一人の娘と一人の息子の養を受けて居りました。娘はお今といひ、弟は長兵衛と申しました。長兵衛は少しばかりの田地を耕してしまへば、桶のたが替をなし、お今は他家へ下女奉公に出て居りました。長兵衛は毎朝早く起き、飯を炊いて父にすゝめ、朝飯後、村中を廻つて桶のたがを替へ、晝飯に歸ります。まづ父にいろ／＼の物を調へて馳走を致し、撫で摩り、世間話などして慰め、午後は又仕事に出で、夕方歸り、夕飯をこしらへて父を饗します。おいしいもの

は父にさゝげ、自分はいつも粗末なものばかりいたゞいて居ります。

人一倍

姉の孝行も決してこれに劣りません。他家に奉公をして、勤に暇のない身でありますけれども、仕事を人一倍餘分に致しまして、朝夕少しづつの暇をもらひ、十町ばかりの道を走つて、實家に歸つて孝養を致します。暑い時には團扇で扇ぎ、寒い時には柴を焚いて温め、背を摩り脚を揉み、いはゆる「色に先だちて意を承くる」で、痒い所に手の届くやうにして上げます。貧しい中にも父はかやうな姉弟を子に持つて、朝夕行届いた孝養を受けるその喜はいかばかりでありましたらう。親子三人水も入らぬこの家庭には、黄金銀の光こそ

色に先だちて意を承くる

水も入らぬ

足らはぬ中
百方

夜の目も合
はさず帯紐
解かず

痛心

なければ、平和はいつも三人の頭上に輝いて居りました。

然るに、いかなる邪神の悪戯でありましたらうか、或年疫病がはやりまして、大事な父があいにくその病に罹りました。姉弟は大いに驚き、足らはぬ中にも醫師を迎へて、百方治療看護を盡しましたが、一向にその験が見えません。たゞ悪くなる一方なので、二人は心配して夜の目も合はさず、帯紐解かず、ひたすら介抱致して居ります。ところが、この疫病には鰻の黒焼が大妙薬だといふ事を聞きまして、二人は大喜いたしましたもの、それを手に入れる道がありません。二人は代るく、介抱の隙を見計らつて、谷川に行つて鰻を捜しますけれども、どうしても見當りません。姉弟は大いに痛

さしもの難
症
拭つたやう
に

神明の感應

(一)百十二代東山
天皇の御代
俳句の大宗
匠

(二)伊賀國の人
元祿七年
三十四年
年五十一
歿

心して、力をおとして居りました。或夜お今が川にまゐつて、水を汲んで歸りますと、途中で、その水桶の中で、がぶりと音がしました。何であらうかと怪しみながら、急ぎ歸つて見ますと、不思議や、大きな鰻が泳いで居りました。姉弟の喜は一通りでなく、早速黒焼を作つて、父に用ひさせました。すると、さしもの難症が、拭つたやうによくりました。

二人の孝行が段々に世に知れわたり、鰻の事も神明の感應だと評判高くなりました。終に藩侯の耳に入り、金や米を褒美として賜はりました。

時は元祿の頃でありました。當時有名な俳句の大宗匠といへば、誰も知る松尾桃青芭蕉翁であります。この芭蕉翁が

とある

人倫の道
律義一遍



松尾芭蕉

或年の春三月、山城、攝津の間を遊歴して居りましたが、長い間、儉約をして、金一兩を餘しました。これは翁が永年心掛けて居た吉野の花見の旅費に充てるためでした。翁は勇んで大和まで参りました。とある路傍の茶店に休息して、圖らず右の孝子お今、長兵衛の話聞きました。翁は涙を流して、感じ入り、その村や道筋を尋ねました。すぐさまそれから孝子の家に参りました。姉弟に會ひましてその孝行を賞し、なほ人倫の道を諭し、父を慰めて一兩の金を出して、いさゝかながら父を養ふ料にといつて贈りました。律義一遍の姉弟は、固く辭退い

たつて

飄然

頭を横にふる
人の心の花
呵々

たしましたけれども、たつて置いて立去りました。勿論翁はもはや吉野へは行かず、そのまゝ飄然として歸つたのであります。

翁は途中で或知人に出逢ひました。知人は直ちに聲をかけて、先生、吉野はいかがでございましたか。と尋ねました。翁は吉野へは行かずに歸るところである事を、かいつまんで話しました。知人は、先生、吉野の花見は永年のお望でございましたのに、御残念でせう。と申しました。翁は頭を横にふつて、いや、決して残念でない。今回は人の心の花を見て、吉野の花見にも優る樂みをいたしました。と、呵々と打笑つて、後をも見ずに去りました。

— 斯民家庭 —

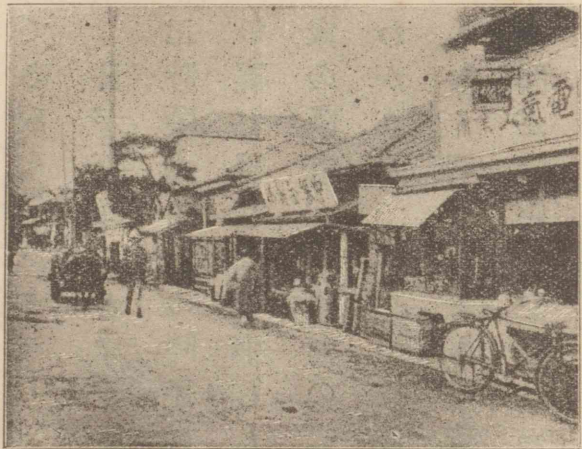
(一) 東京市の西郊
 澁谷町に在り。
 (二) 東京市の西南に突出せる一帯の高地。芝
 区に屬す。
 (三) 東京市の西端新宿より甲州街道へ通ずる街。
 (四) 新宿より東京府下西多摩郡青梅町へ通ずる街道。
 (五) 東京市の北端本郷区より中山街道へ通ずる街道。
 (六) 澁谷町の西方世田ヶ谷へ通ずる街道。

大八車

七 都會と田舎の間

國木田獨歩

道^(一) 玄坂といはず、白金^(二)といはず、東京市街の一端、甲州街道となり、青梅街道^(四)となり、中山道^(五)となり、世田ヶ谷街道^(六)となつて、郊外の林地田圃に突入する處の、市街ともつかず、宿驛ともつかぬ町はづれの光景には、何となく人をして社會といふものの縮圖でも見るやうな思をなさしめるものがある。大都會の生活のなごりと、田舎の生活のなごりがここで落合つて、緩やかに渦を巻いて居るやうにも思はれる。そこには片眼の犬がうづくまつて居る。この犬の名の通つて居る限りが、即ちこの町はづれの領分である。大八車が



(黒目上) 外 郊 の 京 東

二臺三臺と續いて通る。その空車の轍^{わらち}の響が喧しく起つては絶え、絶えては起りつして居る。鍛冶屋の前に二頭の駄馬が立つて居る。蹄鐵の眞赤になつたのが、鐵砧^{かんとこ}の上に置かれ、火花が夕闇を破つて、往來の中程まで飛ぶ。往來の角で話して居る人々が、どつと何事をか笑ふ。月が家並の後の高い檜^{かき}の梢まで昇ると、向側の屋根が白んで來る。カンテラから黒い油煙が立つて居る。その間を村の者、町

せり場

の者が數十人駈廻つてわめいて居る。色々の野菜が彼方此方に積んで並べてある。これが小さな野菜市、小さなせり場である。

日が暮れるとすぐ寝てしまふ家があるかと思ふと、夜の二時頃まで店の障子に火影を映して居る家がある。理髮所の裏が百姓家で、牛らしいうなり聲が往來までも聞える。酒家の隣家が納豆賣の老爺の住家で、毎朝早く「納豆々々」としわがれ聲で叫んで、都の方へ向つて出掛ける。夏の短夜が間もなく明けると、もう荷車が通り始める。ごろ／＼がた／＼絶間がない。蟬が往來から見える高い樹で鳴きだす。だんだん暑くなる。砂埃が馬の蹄、車の輪に煽られて、虚空に舞上る。

虚空

蠅の群が往來を横ぎつて、家から家、馬から馬へ飛んで行く。それでも十二時のドンが微に聞えて、どこか都の空の彼方で汽笛の響がする。

——武藏野——

八 渡 舟

坪内逍遙

しだれ柳のかけひたす
むらこ村このさかひ川。
波があや織る土手際に、
けふも人待つわたし守。
雨の日、風の夜あさ夕に
渡呼びつゝ来る人は、

あや織る

西國巡禮
小荷駄馬

旅あきうごや、村の爺、
町の女房、役場員、
竿かたげたる魚釣や、
獵犬つれし若紳士、
西國巡禮、角兵衛獅子、
郵便配達、小荷駄馬、
なりも言葉もいろくが、
暫し乗合ふ舟の中。
知るも知らぬも知合うて、
語る間もなく向岸、
思ひ思ひにおりたちて、

めでたい

九 春の暮

西へ、東へ別れ行く。
行くを送れば又来る
相手は日々に變れども、
變らぬ流、おなじ主。
岸の青柳、水の月、
波間の鳥もなじみにて、
春秋いくつ重ぬらん。

— 國語讀本 —

九 春の暮

徳富蘆花

庭石菖にはせきしやう一名草あやめの眞盛である。茜あかねがかつた紫と白と、
一本二本はさしてめでたい花でもないが、午の日を受けて

浮模様

ケトワタトシ
ツタシキモフ

何萬となく庭一面に咲く時は、緑の地に紫と白の浮模様、花毛氈モウゼンを敷いたやうに美しい。見る人がないから、日傭ヒヨウのおかみを引張つて来て見せる。

草あやめの外にも、芍薬シヤクヤク紫と白と黄のあやめ、薔薇、石竹、なでしこ、虞美人ユビニン草、花芥子ハナカイシ、紅白除蟲菊、皆存分に咲いて、庭も園も色々に明るくなつた。

畑では麥が日にく／＼照つて、周圍の黯くらい緑に競ふ。春蟬が鳴く。仰おし々しきり子が鳴く。蛙が鳴く。青い風が吹く。夕方は月見草が庭一ぱいに咲いて薫る。

けふは雨が欲しく、風がこひしく、蔭が懐かしい。五月下旬の日であつた。蟬の音、色づいた麥、耳にも目にもざり／＼と

果然

暑く、光る緑に眼は痛いやうであつた。果然、寒暖計は途方もない八十度を指した。

悉皆

落葉木が悉皆若葉から青葉となつたところで、檉、松、杉、樅もみぢ、椎等しほの常緑樹や竹の類が、日に日に古葉を落しては、若々しい若葉をつけ出した。この頃は毎日掃いても掃いても檉しほの古葉が落ちる。

氣輕な落葉木の若葉も美しいが、重々しい常緑樹の柄えらにない嫩やわらかな若葉をつけたところもなか／＼よい。ゆさ／＼と明るい嫩な食べられさうな若葉をかぶつた白檉しろしほの瑞枝みづえだ、杉は灰緑の海藻めいた新芽を簇むら立て、赤松は赭あかく、黒松は白つばい小蠟燭ちろうそくのやうな心芽をつい／＼と枝の梢えだごとに立て、

瑞枝

思ひもなし

(一) 論語先進篇の句。

竹は又「暮春には春服すでに成る。」といつたやうに、譬へやうもない鮮な明るい緑の簀をふつさりとかぶつて、いづれを見ても眼の喜である。

今夜はじめて蚊が一つぶうんとうなつた。

蚊ひとつに寝られぬ宵や春の暮

もう春は暮れるのである。

—みずのたはこと—

自修文

一〇 菜の花と小娘

(二) 志賀直哉

或晴れた静かな春の日の午後でした。一人の小娘が山で枯枝を拾つて居ました。

やがて夕日が新緑の薄い木の葉を透して、赤々と見られる頃

(二) 小説家。宮城縣の人。明治十六年生。

になると、小娘は集めた小枝を小さい草原に持出して、そこで自分の背負つて来た荒い目籠に詰めはじめました。

ふと小娘は誰かに自分が呼ばれたやうな気がしました。

「え、小娘は思はずさう言つて、起つてそのあたりを見廻しました。そこには誰の姿も見えませんでした。

「私を呼ぶのは誰。小娘はもう一度大きい聲でかう言つて見ましたが、やはり答へる者はありませんでした。

小娘は二三次そんな気がして、始めて気がつく、それは雑草の中からたゞひと本、僅かに首を差出して居た小さい菜の花でした。

小娘は頭に被つて居た手拭で顔の汗を拭きながら、「お前、こんな所でよく淋しくないのね。」と言ひました。

「淋しいわ。」と菜の花は親しげに答へました。

「そんならなぜ來たのさ。」小娘は叱りでもするやうな調子で言ひました。すると菜の花は「雲雀の胸毛むねけに着いて來た種がここでこぼれたのよ。困るわ。」と悲しげに答へました。そして「どうか私をお仲間の多い麓ふもとの村へ連れて行つて下さい。」と頼みました。

小娘はかはいさうに思ひました。小娘は菜の花の願をかなへてやらうと考へました。そしてしづかにそれを根から抜いてやりました。そしてそれを手に持つて、山路やまぢを村の方へと下つて行きました。

路に添うて清い小さい流が水音をたてて流れて居ました。暫くすると「あなたの手は随分ほてるのね。」と菜の花は言ひました。「あつい手で持たれると、首がだるくなつて仕方がないわ。眞直にして居られなくなるわ。」と言つてうなだれた首を、小娘の歩調あししらべに合はせて、力なく振つて居ました。

當惑
こまる。

宣告する
公然といひわ
たす。

小娘はちよつと當惑たうわくしました。しかし小娘には圖らずいい考が浮びました。小娘は身み軽く路端ろたんにしやがんで黙もくつて菜の花の根を流へ浸ひたしてやりました。

「まあ、菜の花は生返いきかへつたやうな元氣な聲を出して、小娘を見上げました。すると小娘は宣告せんこくするやうに「このまゝ流れて行くのよ。」と言ひました。

菜の花は不安さうに首を振りました。そして「先に流れてしまふところはいわ。」と言ひました。

「心配しなくてもいいのよ。」さう言ひながら、もうさつそく、小娘は流の上に、持つて居た菜の花を放してしまひました。

菜の花は「こはいわ。こはいわ。」と流の水にさらはれながら、見る見る小娘から遠くなるのを恐しさうに叫びました。が、小娘は黙つて両手を後へ廻し、背そむで跳とる目籠めかごを押へながら、駈かけて來ます。

移氣 うつりやすい
氣持。うばき。

菜の花は安心しました。そして、さもうれしさうに水の上から小娘を見上げて、何かと話しかけるのでした。

どこからともなく氣輕な黄色い蝶が飛んで來ました。そしてうるさく菜の花の上にもつはりついて飛んでゐました。菜の花はそれをも大變うれしがりました。しかし蝶はせつかちで、移氣うつりやすいでしたから、いつか又どこかへ飛んで行つてしまひました。

菜の花は小娘の鼻の頭にぽつ／＼と玉のやうな汗が浮び出して居るのに氣がつかしました。今度はあなたが苦しいわ。」と菜の花は心配さうに言ひました。が、小娘は却つて無愛想むあいさうに「心配しなくてもいいのよ。」と答へました。

菜の花は叱られるのかと思つて、黙つてしまひました。

間もなく小娘は菜の花の悲鳴ひめいに驚かされました。菜の花は流に波打つて居る髪の毛のやうな水草に根をからまれて、さも苦

悲鳴 ひめい
かなしんでな
く聲。

しげに首を振つて居ました。

小娘は息をはづませながら「まあ、少しさうしてお休み。」と言つて、傍の石に腰をおろしました。

「こんなものに足をからまれて休むのは、氣持が悪いわ。」さう言ひながら、菜の花はなほ頻りに「いや／＼」をして居ました。

「それでいいのよ。」小娘は言ひました。

「いやなの。休むのはいいけれど、かうして居るのは氣持が悪いの。どうかちよつと上げて下さい。どうか。」と菜の花は頼みましたが、小娘は「いいのよ。」と笑つて、取合あはひひません。

が、そのうち水の勢で、菜の花の根は自然に水草からすりぬけて行きました。そして不意に「流れる。」と大きな聲をして、菜の花は又流されて行きました。小娘も急いで立上ると、それを追つて駈出しました。

取合あはひ
はぬ
ちまはぬ
ひてにならぬ

少し來た所で、やつぱりあなたが苦しいわ。」と、菜の花はこはごは言ひました。

「何でもないのでよ。」と小娘も優しく答へて、さうして菜の花に氣をもませまいと、わざと菜の花より二三間先を駆けて行くことにしました。

麓の村が見えて來ました。小娘は「もうすぐよ。」と聲を掛けました。

「さう。」とうしろで菜の花が答へました。

暫く話は絶えました。たゞ流の音に交つて、ばた／＼ばた／＼と、小娘の草履で走る足音が聞えて居ました。

「ちやぽん」といふ水音が小娘の足元でしました。菜の花は死にさうな悲鳴をあげました。小娘は驚いて立止りました。見ると菜の花は、花も葉も色が褪めたやうになつて、「早く／＼。」と伸上つ

て居ます。小娘は急いで引上げてやりました。

「どうしたのよ。」小娘はその胸に菜の花を抱くやうにして、うしろの流を見廻しました。

「あなたの足元から何か飛びこんだの。」と菜の花は動悸がするので、言葉を切りました。

「いぼ蛙なのよ。一度もぐつて、不意に私の顔の前に浮び上つたのよ。口の尖つた、意地の悪さうな、あの河童のやうな顔に、もう少しして私は頬つべたをぶつけるところでしたわ。」と言ひました。

小娘は大きな聲をして笑ひました。

「笑ひ事ぢやあないわ。」と、菜の花はうらめしさうに言ひました。「でも、私が思はず大きな聲をしたら、今度は蛙の方でびつくりして、あわててもぐつてしまひましたわ。」かう言つて、菜の花も笑ひました。

(一)志賀直哉の著作集全一巻。大正十年東京春陽堂發行。

間もなく村へ着きました。小娘は早速自分の家の菜畑に一緒にそれを植ゑてやりました。そこは山の雑草の中とはちがつて、土がよく肥えて居りました。

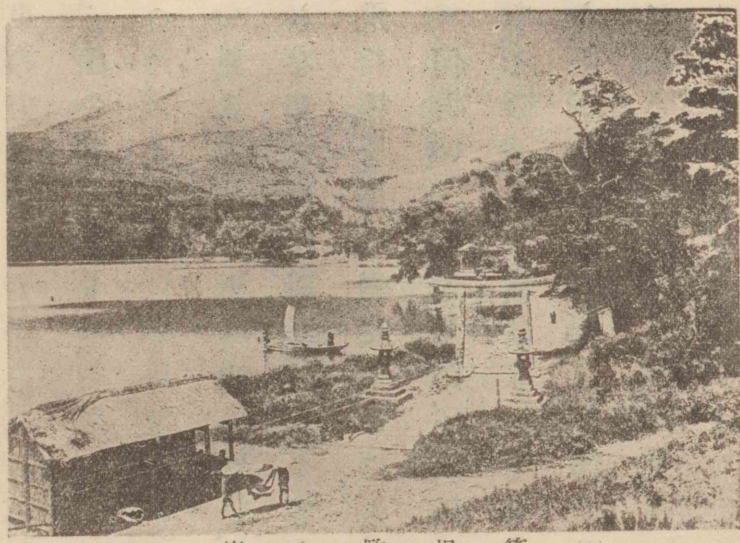
菜の花はどんく、伸びてそだちました。さうして今は大勢の仲間と仲よく、仕合せに暮せる身となりました。——荒絹——

一一 一抹の雲

前田 晁

荒れて荒れて荒れぬいて、湖水の水は見る間に一尺、二尺、三尺と殖えて来て、わたしのゐる小さな別館の軒先までも漲り溢れて来た。その恐しく脅されたひと夜が明けて、珍し

悠然 全容 (一)相模山中の四九八尺



く朗かな日が、からりと照つてゐた朝であつた。わたしは机の前に坐つて、窓からすぐ目の前に悠然と根その全容を見せてゐる駒ヶ嶽を眺めてゐた。そこにはたゞ一抹の雲が、淡く中腹にかゝつてゐるさきであつた。わたしはそれを見詰めてゐた。と、それが、その一抹の雲が、西から

pm

東の方へ、のろ／＼と、のろ／＼と移つて行く。そしてとうとう山の肩からすべつて行つて、澄んだ青空の中へ消えて行つた。

見るとその上の高い空に、鳶が一羽、ぐる／＼と輪を忍がきながら、おほやうに舞つてゐた。ちやうど人間の發明した飛行機を、遠く微に見るにも似てゐた。

陰晴不定

何といふ珍しくいい天氣だらう。陰晴不定のこの幾日かを、この一日で償はうとでもするのであらうか。わたしはさう思ひながら、また目を駒ヶ嶽の中腹に返して見た。と、そこにはまだ一抹の雲がかゝつてゐる。そしてそれが、やはり徐に、のろ／＼と西から東の方へ移つて行つて、そして青空の

中へ消えて行く。

はてな、どこからあの雲は來るのであらう。目を西の方へ轉じて見ると、一帶の連山はすつかり雲で蔽はれてゐて、勿論富士の姿も見えない。それにしても、あの一抹の雲が、そこから切れて流れて來るのであらうか。

わたしは駒ヶ嶽へまた目を返した。やはり一抹の雲が、ほんたうに吹けば飛びさうな一抹の雲が、中腹にかゝつて、東の方へ移つて行きつゝある。

目を凝らす

わたしはじつと目を凝らして見た。そして、おやつと驚いた。雲は山の中腹からちやうど煙が湧立つやうに、そろ／＼と湧きあがつてゐるのであつた。木らしい木もない、澤らし

領域

い澤もない、丸裸といつてもいいやうなその山腹から、しづしづと湧出して來るのであつた。

へえ。雲はあゝして湧くものか。岫より出づとは聞いてゐたが、あんな骨だつた禿山から、まるで地震カが群れたつやうにして湧くものだとは思はなかつた。

おや。いつかそれが見る間にだんく、強く、烈しく濃くなつて來た。そして駒ヶ嶽はその中腹から上を、すつかり雲の中に没してしまつた。何といふ早い漲り方であらう。いつか日もかげつてゐる。青空は心細いほど次第にその領域を狭くしてゐる。さつきまで朗かな聲で歌つてゐた鶯も、淋しい涙つぽいやうな聲に變つてゐる。

篠つく雨

あゝ、あの鳶はどこへ行つたであらう。と思ふ間に、雨が、大粒の雨がばら／＼と降つて來た。

が、それが湖水の上に雨脚を亂して歸つて行つてしまふと、日がにつこりと笑つたやうな光を見せた。けれどももうさつきのやうに、爽な麗な光ではなかつた。涙ぐんだ赤い光を、無理に笑はせてゐるやうな光であつた。

あゝ、また今夜も荒れるのか知ら。わたしのゐる小さな別館が、烈しい風に吹卷かれ、篠つく雨に脅されるあの暗い晩が、今夜もまた來るのであらうか。

— 遠望 —

一二 眞の人

古き歌に、人多き人の中にも人はなし人となれ人人となせ人」といへるあり。天地の恵を受けて、人と生まれ出でたる上は、誰しも人の中の人となりて、よき名を保たまほしきことなり。人の中の人となれとは、世に大いなる勳を立て、後の世までも敬はるゝ身分となれといふのみにはあらず。その心を直くし、その行を正しくして、俯しても、仰ぎても、天にも地にも耻ぢぬ人となれといふなり。世には富貴にして、却りて心の貧しき人あり、門地高き家に生まれながら、その行の極めて卑く賤しきあり。身分門地の如何によらず、心の高く

身分

俯しても
仰ぎても

門地

貴き人をこそ眞の人とはいふなれ。

眞の人は我が身をも忘れて人の爲に盡さんと思ふ。これ貴き心の外に現るゝなり。我が身一人よければ、人はいかやうにても構はずといふは、人にして禽獸の心あるなり。親に對しての孝、夫に對しての貞、さては主人に對しての義理も、他人に對しての慈善も、みな己を第二にして、人の爲に盡さんとする眞心より出づるなり。人の爲に盡さんとする眞心は、即ち犠牲的精神にして、その心の外に現れたるは、即ち犠牲的行爲なり。人の心としては、犠牲的精神より美しきはなく、人の行としては、犠牲的行爲より貴きはなし。人の危難に陥れるを見ては、我が身の危きをも忘れてこ

禽獸の心

犠牲的精神

はた

れを救はんとし、人の難儀に沈めるを見ては、我が身の困苦を物ともせずこれを除かんと努むるは、たゞこの美しき真心より出でて、この貴き行爲となるなり。かゝる事例は古來少からず、今の世にもはたいと多し。

綬

明治十四年に褒章條例の制定あり。これは、これ等の貴き人々を世に顯し知らしめん爲なるべし。褒章には紅綬、綠綬、藍綬、紺綬の四種あり。紅綬褒章は自己の危難を顧ず、他人の命を救ひたる者に賜ひ、綠綬褒章は孝子、順孫、節婦、義僕、又は實業に精勵して衆人の模範となる者に賜ひ、藍綬褒章は學問技藝上の發明、改良、著述、教育、衛生、慈善、防疫等の事業、學校、病院の建設、道路、橋梁、堤防等の修築、田野の開墾、森林の栽培、

模範

事績

水産の繁殖、その他一般農商工業の發達に關して著しき事績をなし、公衆の利益を興したる者に賜ひ、紺綬褒章は公益



紅綬褒章

のため私財を寄附し、功績顯著なる者に賜ふなり。この外、明治二十年には、別に黃綬褒章を定められて、海防事業の爲に獻金

海防

したる者にも賜ふこととなれり。

多くの私財を抛ちて公衆の事業に盡すが如きは、富者ならではなし難かるべし。然れども多くの善行は心がけ一つによりては、身貧しき人もなし難きにあらず。又かよわき一少女にても、出來得べからざるにあらず。事業の大小はしば

かよわき

不義にして
富めりとも
何かせん

らく言はず、常に人の爲に盡さんと思ふ眞心だにあらば、その眞心はいつか外にあらはるべきなり。されば明治十四年褒章條例の制定せられし以後、これを受けたる人々の數は、今日に於てすでに數百人の多きに上り、その中には身分卑く、家貧しき人も少からず。たとひいかに卑き身分なりとも、これ等の人々は皆人の中の人にして、誠に尊ぶべく、敬ふべきなり。

我等はもとより勉勵刻苦して、家を興し、産を殖さざるべからず。然れども、不義にして富めりとも何かせん。常にその心を正直にして、眞の人たらんこそ望ましけれ。

一三 小木曾つぎ女

表彰す
質朴
勤儉貯蓄
産業を治む

誰彼の家
心を碎く

小木曾つぎ女は岐阜縣土岐郡曾木村の人なり。この村は岐阜縣の模範村として、縣知事より表彰せられたるほどなれば、村民大方質朴にして、勤儉貯蓄の風に富めり。然るにつぎ女の父は少しも産業を治めず、家甚だ貧しければ、つぎ女は一箇年間學校に通ひたるのみにて、八歳の時よりは子守奉公に出されたり。かくて後は、近村の誰彼の家に下女奉公し居たるが、給金は父いつも前借し行きしかば、一厘半錢とても手に入りたる事なし。つぎ女はこれを悲しむにあらざれども、我が年中の辛苦が、空しく父の一夜の酒代となるを思ひて、いかにもして父の行を改めしめんと、心

從兄

水の泡

まめくし

を碎かざる日なかりき。
 折しも、長野なる某醫師の家に奉公せる從兄の許より、我が仕ふる主人の家に女中の入用あり。良き主人にて、末のためにもなるべし。心を決して來らずや。」と言ひこしたり。つぎ女つくづく考ふるに、遠方にあらば給金の前借もかなはざるべく、年月の辛勞の水の泡となることもなかるべしと、遂に意を決してその言に従ひぬ。時に年二十なりき。かくて主人大事とまめくしく立ちはたらきて、年二十圓の給金をば、成るべく使はぬやうにして預け置きしが、僅か二年餘の後、凡そ四十圓ばかりの貯金を得、喜び勇みて故郷に歸れり。

爪弾

境遇

正業に就く

殊勝の志
さしもの
翻然

家に歸れば、父は以前に變らぬ不身持にて、村民に爪弾せられ、何人も言を交へざるほどのあはれなる境遇に居たりき。つぎ女は涙を流して父を諫め、携へ歸りし金を父の前に差出して、「これを資本として、正業に就かせ給へ。」と請ひぬ。
 八歳の幼き時より、苦勞に苦勞をかけ、使はるゝだけ使ひしのみにて、かつて親らしきふるまひしたる事もなきに、ただ一心に親を思ふ真心より、年若き身のほしかるべき衣髪いばみの飾ともせで、貯へ得たる金子を差出したる殊勝の志、さしもの父金作も、翻然として身の過を悔いぬ。
 金作はこれより生まれ變りたる人の如く、朝は早くより、夜は遅くまで、専ら農業を勵みしかば、次第に家産も出來、村

部落

をいし
けなげさ
名に負かず

民の信用をも得て、後には一部落の組長にまで推されるに
至れりといふ。少女心の一筋に父の非行を改め、家産を興さ
しめしをいしきけなげさ。曾木村はつぎ女を出したるのみ
にても、模範村の名に負かずといふべし。

一四 慈 愛

川路柳虹

灌木

青草が息をしてゐるやうな畦道
ちよいごした灌木の木かげに、
投捨てた草の籠、
その中にはあかんぼが眠てゐる。

まごかな

土まみれの母は夢の中から
顔を出してはあかんぼを眺めた。
そのまごかな微笑が
うつくしい日に光る。

一しきり

遠くを走る汽車のごころきが一しきり、
やがて向ふへ消える。空には雲雀の歌。
麥の波が時をり百姓の姿を隠すけれど、
あかんぼは眠りながら、この圓滿な光を自由に
吸つてゐる。

一五 舊師に贈る

一筆啓しと追々暑きに向ひやうとて
 先生にはお愛もなくお襟嫌よくいらせられ
 此のおめでたくお喜ぶ降つて私のお陰様
 にて女学校に入學致しうよりはや二月に
 相成也もまだ一交も缺席はもとより遅刻
 早退も致せしことかく先生の御教を守りて
 よく遊びよく學び居はばお安心下されぬ初は
 英語殊におびりく誠に骨が折れぬと今はや

(御變)

(慣)

懐けてその日に後れぬやうに相成申候
 校長先生はめ諸先生方誠に親切にお教へ
 下され上級の方々は優しくおつたはりわされ
 同級生も心易く何も蒙らずやうの事これ
 なく何よりのは答と存居松田様竹内様は
 学校の往復に誘ひ合ひしり夜々これありつも
 先生の御愛のみ致居はつれ夏休にはゆきお細心
 中よとてよく樂み居は先生は御沙汰お詫
 かたぐ近況おしらせやうか

(噂) 御詫かたが

(一)山口縣。開港場。海を隔てて。門司に對す。又馬關ともいふ。

(二)有名なる都市。開港場。神奈川縣。麻の所在地。東京の西南八里。

一六 旅人となりて

吉田絃二郎

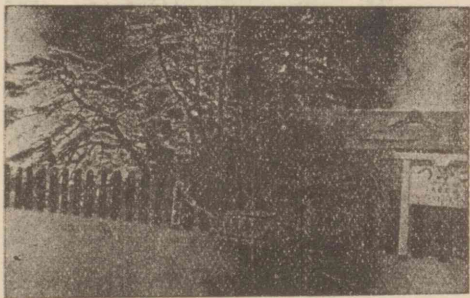
今朝八時半の特急で、下關まで一氣に走ることにし、ました。避暑の客や何かでこみ合ふことだらうと思つてゐましたが、さほどでもなかつたので、大助りでした。東京を立つ時には珍しく細雨を見ましたが、横濱あたりからすつかり霽れて、又もとの蒸暑い天氣になりました。青い山、青い畑が鐵道線路を挟んで迫つて來ると、谿間にも、野の面にも、白百合がちらほらと見えます。葛の花や朝顔が、畑にも家のまはりにも咲いてゐます。空も、山も、流も、光に輝いてゐます。

眼を閉ぢて車のきしる音を聴きます。汽車はひたすらに光の野を西へ走ります。

(一)神奈縣足柄下郡。

(二)同足柄上郡。

in Carpet.



國府津(一)に着いて始めて海らしい海を見、山らしい山を見ることの出來たのは、うれしいことです。箱根(二)や乙女峠には雲府(三)がかゝつてゐます。

箱根に入つて、さすがに高原らしい涼しさを覺えました。文字通りに青いカーペットを敷いたやうな裾野には、明方の星をばらまいたやうに、白い百合が咲きこぼれてゐます。線路に沿うた圓い柔な線をゑがいた丘には、離々たる青草の

青嵐

上に、盛上げられたやうにして白百合が咲いてゐます。ねむの花も、石竹も、女郎花も、一樣に青嵐と芳草のうちコトシロコノハに七月の光を浴びてゐます。

清冽

川は瘦せてゐます。白い礫の上を滑る清冽な水は、青い山の根を縫うては、青い嵐のなかに隠れて行きます。蓑を被て

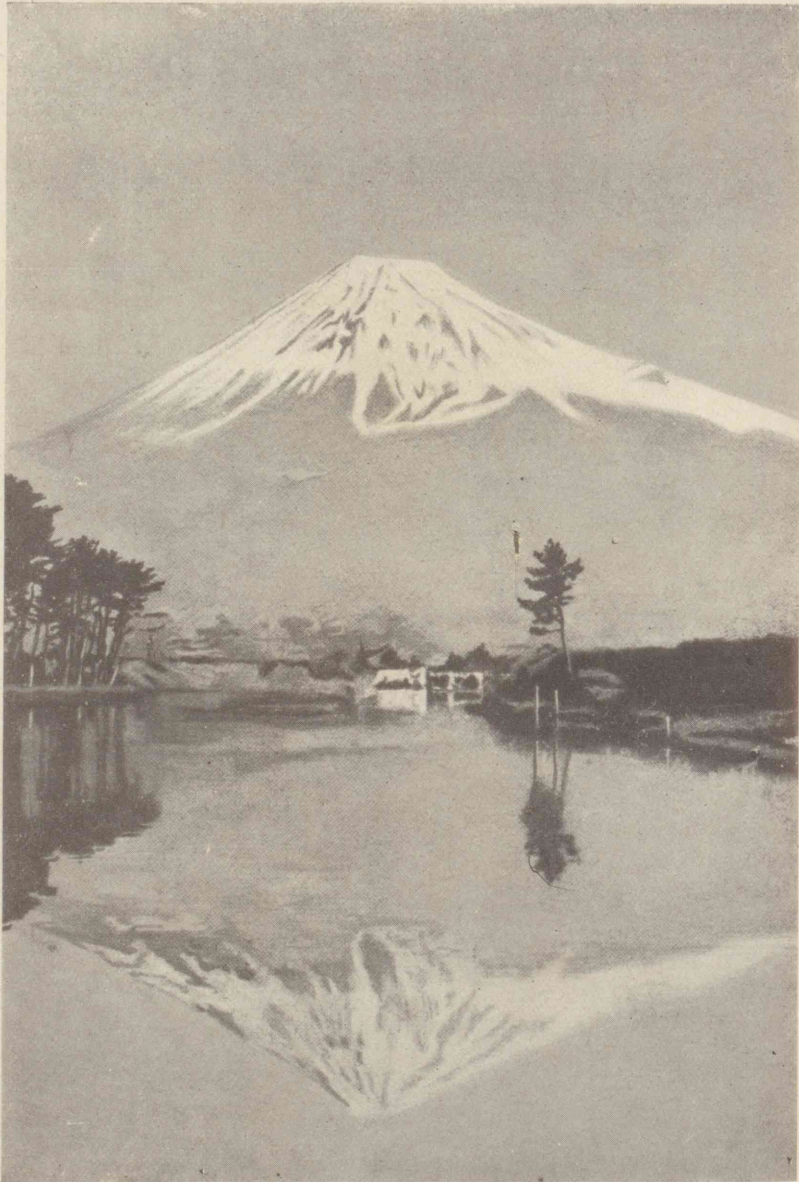
深潭

深潭に釣を垂れてゐる男もあります。高原を走る汽車を見下して、更に高い山道を歩いてゐる少年の群もあります。乙女峠には雨が降つてゐます。

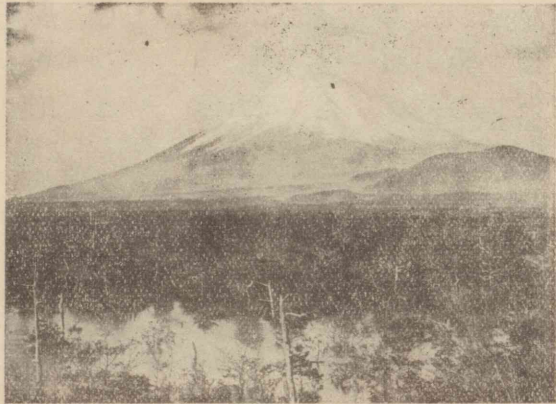
「富士山は見えませんか。」

沈黙を破る

私は突然隣の男に沈黙を破られました。その男は始めて日本を旅行する臺灣人でありました。富士は雲に鎖されて



富士山 (田子浦よ望む)



富士の裾野

見えませんでした。私はこの旅人に對して氣の毒に思ひました。私は微に雲霧の間にほの見えてゐる富士の稜線をたどつて、その男に富士の形を説明しました。

汽車は裾野を三島の方へ走つてゐます。時々横なぐりに時雨のやうに寂しい雨が降つて來ます。斜に打ちつけられた雨の脚がまだ乾き切らぬ間に、正午の太陽が焼くやうに硝子窓を射ます。けれども高原の風は青く薫つてゐます。禁喫煙の禁を犯して煙草をふかしてゐる男もあります。けれ

薰風
嬰兒
さながら

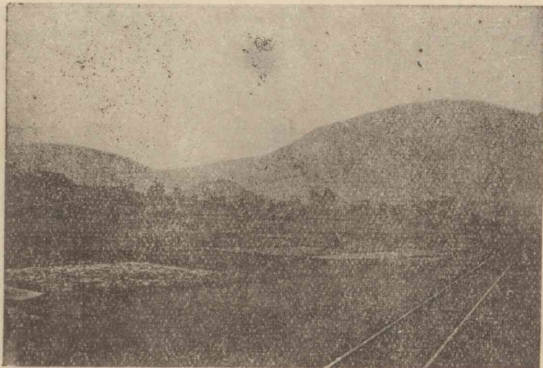
どもここでは、それを憎む氣にはなれませぬ。薰風と青嵐の間まに包まれた人間の集合は、自然が生んだ可憐な嬰兒の遊戯に過ぎません。彼等の行爲はすべてさながらのもの、善きものとして、受けいられることが出来るやうに思はれます。

私は幾度か小さな行李の底から本を取出しました。けれども私はすぐ本を捨てました。どうしてこの偉大な自然から私の眼を放すことが出来ませう。

桑の畑、芋の畑、黍の畑を隔てて、汽車は富士を中心に大きな圓をゑがいて走つてゐます。黍の赭い穂の上に雲の峰がかゝり、四十雀しよからの唄が聞えてゐます。

抒情詩

(一) 近江國。琵琶湖の北方。美濃との近國境。



馬洗ふ里の子供たちの上に煙を残しつつ、汽車は鐵橋を

渡つてゐます。

伊

吹

山

うとくと眠つてゐた眼に、紅い蓮の花の咲いた田が長く、續いて居るのが映ります。淡い薰が夢を誘ふやうに窓を襲うて來ます。一羽の白い鳥が紅い花の上を靜かに翔んで行くのが、靜かな抒情詩を讀んでゐるやうな心持を喚びおこします。

す。
おひく、太陽が陰つて行きます。伊吹山の白く頰れた傾

(一)岐早縣。慶長五年石田三成等と戦ひし處。康和の德川家康と戦ひし處。米原里東北一里餘の東北。(二)滋賀縣。米原里東北一里餘の東北。(三)夏草やつはものどもが夢のあと。

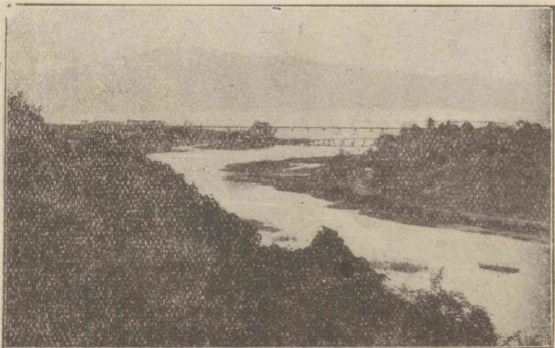
聯想

斜面が、午後の太陽をまともに反射してゐます。

關原や醒井などいふ聯想の多い驛の名が續きます。芭蕉

の夏草の句を想はせるほど、山も平野も青々としてゐます。この附近から西は野の百合が紅くなります。

湖水に沿うた村々の家の白い壁に、力ない夕陽の影が動いてゐます。田や畑の隅々に小さな木立があつて、そこには青い竹で作られたはねつるべがかゝつてゐます。若い女たち



(近附田瀨) 湖 琵琶 琵琶

ちが二三人づつで耕作物に井戸の水を撒いてゐます。二段

水郷

(一)近江國。山城に跨がる。海拔二八六〇尺。

(二)瀬多川。琵琶湖より出て宇治川となる。

(三)近江と山城との境。

(四) Tunnel (隧道)

黄昏

にも三段にも水車をかけて、湖の水をかい出してゐるのも、水郷の感じを深くさせます。

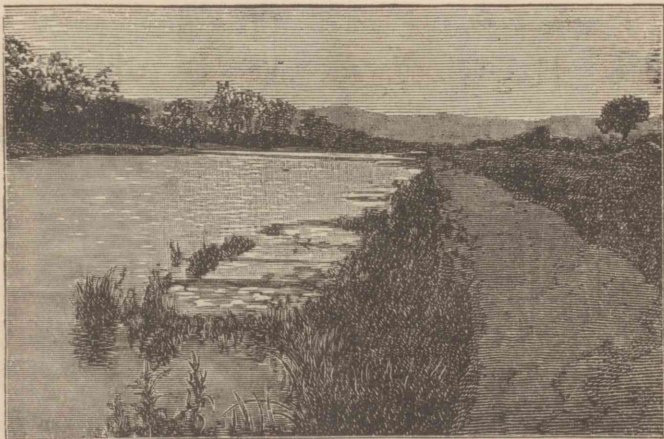
比叡の峰は曇つてゐます。黒い雲を破つて眞紅の夕焼が湖面を壓するやうに燃えてゐます。瀨多の流に群をなして白い鳥が眠つてゐます。

逢坂山のトンネルを越えると、大きな角の牛がのそくと荷車を曳いて、近江の方へ歩いてゐます。黄昏は牛の背に落ちかゝつてゐます。

日はとつぷり暮れました。紅い提灯の灯が闇の中に幾段にも幾段にも重つて、流に沿うて映つてゐます。賀茂川の灯。

(五)京都市の東部を流る。

Platform
(歩廊)



賀茂川 (七條大橋附近)

人々は窓を明けて、闇の底に紅い灯を見出してゐます。

長いプラットホームに下駄の

音が響きます。思ひなしか下駄の

音までゆつたりと聞えます。

人々は大方出て行つてしまひ

ました。新聞紙や折などの散らか

つた薄暗い室のなかに、私はまた

これから先の二百里あまりの旅

路を想つてゐます。

さすがに旅らしい淋しさがど

— 生くる日の限り —

ことなく漂うてゐます。

一七 紅花と白百合

一 紅花

幸田露伴

紅の花は、人の園に養ひ鉢に植ゑたるをば見ねど、姿優し

世のつね

く色美しく、世のつねの人々の

愛で喜ぶ草花なんどにも劣るべ

くはあらぬものなり。人は花の大

きからねば、眼ざましからずとて

願

ぬにや。花はその形の大きくて香の高きをのみ愛すべきも

のかは。この花おほよそは薊あざみに似て、薊のやうに鬼々しから



紅の花

はかなげ

ず。色の赤さも薊の紫がかりたるに似て、やゝ黄ばみたれば、卑しげならず。葉の淺翠なるもよく映りあひて美しく、一體の姿のかよわく物はかなげなる、誠にあはれ深し。べにはこの花より取るものなれど、この花のみにては色を出さず、梅の酸にあひて始めて紅の色の成るなり。未だこの事を知らざりし折、庭の中にいさゝかこの花を生し立てしが、その紅の色の濃からぬをいぶかしみつゝ、朝な夕な疑の眼を張りて打ちまもりたりしをかしさ、今に忘れず。 — 調言 —

二 白百合

徳富蘆花

宵の明星

後山山腹の茅ちがや青々と茂れるなかに、宵の明星の如く一點、兩點、山百合の花白み初めしと思へば、いつかここにも開き、

いぶかしむ

中夜の星

かしこにも笑み、今は中夜の星よりも多くなりぬ。山に登りて花を訪へば、花は茅深きなかに潜みて、容易に見難し。歸りて吾が庭に立ちて眺むれば、花は茅より秀でて、ほゝゑめるさまなり。

朝露山に満つる頃は、花もうつとりと眠げなり。

夕風そよ吹きて、満山の茅うねうねと青波をうたす時は、花も波のまに／＼漂ひて、さながら水の上なる藻の花のゆらぐとも見ゆるなり。

日落ちて、山闇うなり行く時、點々として花のみ白う暮残るさま、いとあはれなり。 — 自然と人生 —

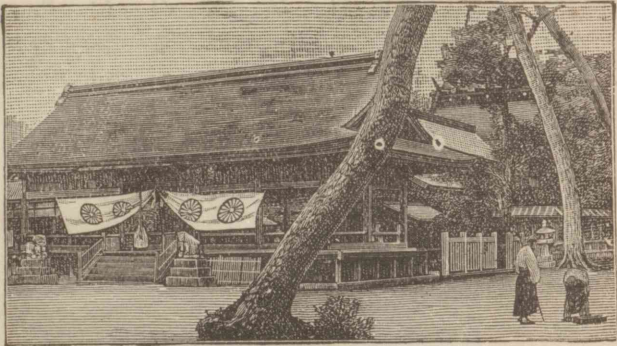
自修文

一八 花の傳説

一 桃

(一)神武天皇より
も前の時代。
(二)天照大神や素
戔鳴神の御
父。
(三)この世の中。
(四)死んだ者の行
くといふ國。

神代(一)の昔伊弉諾(二)の神が、お妃(三)の伊弉册(四)の女神を追つて、死人の行く夜見(五)の國へ行かれた時のことである。男神は美しい女神のお姿が、まるで變つておしまひになつたので、愛想(六)をつかして逃げて歸らうとなさると、女神は女の鬼どもに、男神のお後をお追はせになつた。男神はお困りになつて、頭に結んだ葡萄の蔓(七)の髪飾をお投げになると、葡萄の實(八)がなつた。鬼がそれを拾つて食べ、てゐる中に、神はどん／＼お逃げになつた。鬼が又追つかけて來ると、今度は鬢(九)に挿した櫛(十)を抜いて、一本一本齒を缺いて投げられると、笄(十一)が生えた。鬼がそれを抜いて食べてゐる中に、又お逃げになつた。とう／＼(十二)娑婆(十三)と冥土(十四)の境まで來た時、ふと見ると、そこ



官幣大社伊弉諾神社(淡路國津名郡多賀村)

に大きな桃の木があつて、實が一杯なつてゐた。神はこの樹の上にお上りになつて、押寄せてくる鬼の軍勢に實を取つてはおぶつけになると、鬼は閉口して逃げて行つた。桃の實をぶつけて悪い鬼を拂ふといふ事は、これから始つたといふ。

二 紫苑

昔支那の國に、親孝行な二人の兄弟があつた。父親に別れてから二人は悲しんで、明けても暮れても、墓のほとりて泣いてゐた。けれどもいつまでもさうしてゐては家業(一)が廢(二)つてしまつて、つまりは父にも不孝だと思ひ返したので、兄は或日墓の傍に忘草(三)を植ゑて、長

永く忘れな
い云々
紫苑を植ゑて
おけば永く忘
れぬといは
れて居たの
であらう

靈驗
あらたがし
るし
未來
これからの
こと

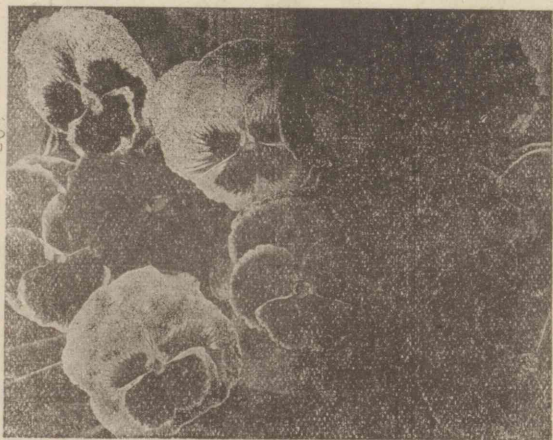
(1) England.
(英吉利)

い間の悲みをふつつりと忘れてしまひ、明くる日から役所に勤めて、毎日の仕事に精を出した。けれども弟は兄の仕方を薄情だと怨んで、自分は兄とは反対に、永く忘れない心のしるしにされてゐる紫苑の花を墓の傍に植ゑて、自分はいつまでも父の慈愛を忘れまいと誓つた。さて或日、いつもの通り墓へ行つて泣いてゐると、墓の中から聲が聞えて、「わたしはこの墓を守る鬼だが、神様が、お前の優しい心をかはいさうに思し召し、わたしに命じて、お前の一生の福をお守らせになつた。この後は毎晩夢の中に現れて、あすの日の事をお前にお前に教へてやる。」と言つた。その靈驗であらうか、それからはこの弟は未來の事によくわかる國中第一の賢人になつて、幸福に世の中を送つたさうである。

三 三色堇

(1) イギリスの田舎では、三色堇の事を、少女たちが「一つ頭巾の三

(1) France.
(佛蘭西)
三位一體
キリスト教で
父(天帝)と子
(キリスト)と
聖靈の三つは
實は同一物で
あるといふこ
と。三位一體
の神様とは即
ちキリストに
いふ神。



三 色 堇

つ面さんと呼んでゐるが、フランスの田舎では、同じ草を少女たちが「三位一體の草」といつてゐる。昔この花は、その色の美しいばかりでなく、香氣までが高くて、姉妹の堇の花も及ばないほどであつたから、毎年春になつて、麥畑の間からこの花が咲出すと、誰も彼も我勝に畑に入つて、花を摘取つて行くので、夏になつても、麥畑には一粒の麥の取入もなかつた。それを優しい心の三色堇が大層悲しみ、天にいます三位一體の神様にお祈りをして、自分の美しい色はともかく、せめて多くの人の心を惹く高い香氣だけでも、お取りになつて下さいと願つた。そ

れからは三色堇にはもうたゞの堇の花のやうな香氣がなくなつてしまつた代り、その年からは麥畑に澤山の實入みいりがあつたといふ。

一九 海王國の婦人

肝付兼行

純粹
雲泥の相違
一斑

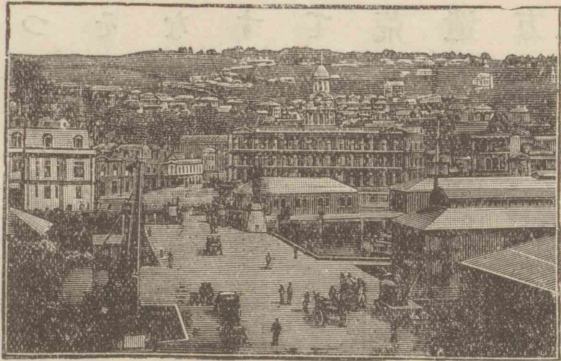
我が國とイギリスは純粹な海國で、東西相對して世界に類稀な國であります。この兩國民の風俗習慣を比べますと、實に雲泥の相違を發見致します。ここに壯快な話がありますから、その御話をして、かれの習慣風俗の一斑を窺ふことに致しませう。

（ニ）
New Zealand

我が國より南少し東へ、約四千五百哩を隔てて、南緯三十四度から、四十八度の邊に達する一つの島國（一）があります。こ

優待

周旋
饗應
日も又足ら
ず



ニュージーランドの首府

の島國は南島、北島に分れて、イギリスの殖民地でありますから、その風俗も全くのイギリス風で、國人は一般に海軍を重んじ、海軍士官を貴びます。

明治十八年の事でしたが、練習艦筑波が遠洋航海をしてこの地に参り、北島の或港に寄りました時、その地の人民は我が海軍士官を非常に優待しました。市會の議長、議員等は、その夫人、令嬢と共に百事に周旋し、我が士官を饗應するに、日も又足らずといふ有様でありました。加ふるに市長は、少し隔つた海

岸に温泉の出る別荘を所有して居るに任せ、是非その地へ船を廻して遊べとの勸でありました。そこで我が艦長は、せつかくの厚意を辭するに由なく、廻航の約束をしました。その翌日突然公命の電報が參つて、俄に港を出發する事になりました。それ故約束に背く申譯、且は過日來の待遇に對する謝辭と離別の辭を述べさせる爲に、總員の代表者として、一士官をボート(^(一))に乗せて出しました。然るに、當日は海が荒れてゐた故、漕手をば乗組三百名の中から選りに選つて遣りました。この穩ならぬ海上を、我がボートと行違に、陸の方から本艦を目ざして、一小船に帆を揚げ、白波を蹴立てて快走して來るものがあります。そこで我が艦員はいぶかし

〔Boat. (船艇)〕
選りに選る

舷梯

何ぞ圖らん

拔錨

〔一名は品之丸。感に打たる。〕
〔King-o-Saxons. 英國人のこと。〕

決して偶然にあらず

く思つて見て居りましたが、やがて本艦に着して、舷梯を上り、舷門にはいつて來るのを見ますれば、何ぞ圖らん、前日の響應に周旋した貴婦人、令嬢たちではありませんか。ましてその乗組總員八名、一人の男子をも交ぜないとは、實に意外でした。これは新聞紙で我が軍艦拔錨の報を見て、告別の意を表せんが爲に來たのであります。

これは、當時の艦長であつた有地中將の、感に打たれたの物語であります。女子にこの勇氣があればこそ、アングロサクソン民族が三億八千萬の人民を支配して、その領土に日没を見ないのであります。英國の今日あるは、決して偶然ではありません。我が國の一般婦人の風と比べましたならば、

長大息

皆様はどんなお感じが浮びますか。私は長大息の外ありません。

二〇 汝の母より

姉崎 正治

今次

(Deutschland.
(擯逸))

塹壕
飛翔す

今次の世界大戦に於て、イギリスの一飛行士官が、敵たるドイツの飛行機を射落した時の事である。彼は敵機の地に落ちるのを見ると共に、それに乗組んで居る敵兵の事を思ひ、敵の塹壕前ながら、敵機の跡を追うて着陸した。敵機は翼を折つて破れ、乗組士官の體は地に横たはつて、呼吸はすでに絶えて居た。敵ながら今まで空中に飛翔して居た人の事を思ひ、物のあはれを覺えて、その死體を片附けてやらうと、

(Pocket.)

一葉

武運強く

胸のポケットの邊にさはると、そこに一つ堅いものがあつた。これを搜り出して見ると、一葉の寫眞で、それには女の手で「汝の母」と書いてある。即ち今戦死した士官は、空中戦にも常にポケットに母の寫眞を藏して居たのを見て、その士官は一層のあはれに堪へず、まづ敵の死體を身方の塹壕にもたらし、然る後再び自分の機に乗じてなほ一戦した。その日の戦にもイギリス士官は武運強く、安全に身方の戦線の後に歸つた。

その後イギリス士官は、この射殺した敵とその老母のことを思ひ、それにつけても自分の身の上、且は早くに亡くなつた自分の母のことを考へ、感慨に堪へず、敵士官の姓名を

たどつて、彼が母へ一書を送つた。その書面は次の通りである。

「自分はイギリスの飛行士官です。何月何日、私は敵たるドイツの一飛行機を射落しましたが、その敵兵は死ぬまで母御の寫眞を大切にポケットに藏して居たのを發見し、その母御たるあなたにこの手紙を差出します。

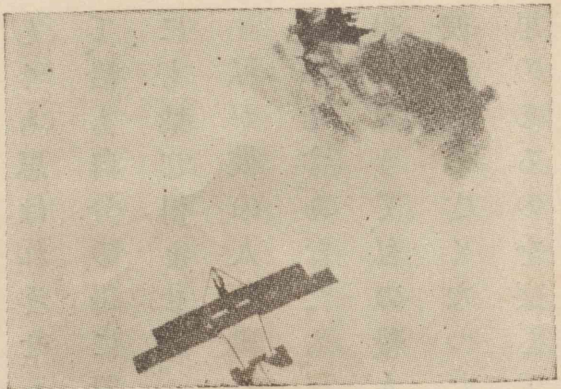
殘忍
偵察す

私はあなたの御子息を殺しました。しかしその人を憎んだのでもなければ、その人の母御たるあなたのお悲みを知らない筈もないのです。たゞ戦争といふ殘忍な仕事に於て、これは私の義務でした。敵士官即ちあなたの御子息が、身方の陣地を空中から偵察して無事に歸られたな

敬意を表す

無量の感

いと



空中戦の光景

ら、その結果、身方は反對に攻撃を受けて、幾人かの兵は、そのために命を失つたでせう。この不幸を防ぐ爲に、私は敵機を射落しましたが、その乗組士官の身體に敬意を表し、それを片付けようとする時に、その人の母御たるあなたの寫眞を發見して、無量の感に打たれたのです。

私は子供の時に母を喪ひ、今でも人に母親があるのを見て、羨ましく思ふのですが、私の殺した敵士官には、あなたといふいとしの母親があり、死

ぬまでその寫眞を抱いて居られたのを見ては、自分はずつとしては居られませんが、殺した私の手紙を見ては、口惜しくも思はれませうが、私としては、彼の人の母御に對して、恰も自分の母に對するやうな親しい感じを、悲みの中にも禁じ得ません。

私が彼の人を殺したのは、戦争といふ残忍な悪魔のした事です。あなたも、又亡くなつたあなたの御子息も、この事を思つて、私の殺人を赦して下さいさうせう。さうして又彼の人の亡くなつた代りに、私に一人の母を得たやうな思のあるのを察して下さいさうせう。今私の書くこの手紙は、彼の人と私と二人の魂が一緒になつて書くのだと思

中立國

つて下さい。もうこれ以上には書けません。涙で眼は曇り、筆を執る手もふるへて書けません。」

この手紙はイギリス軍の本營から、中立國の手を経て、ドイツ國內の宛名の人に届いた。一人の兒を喪つた母がこれを読んだ時の感は、思ふも涙の種である。さうしてこの婦人は、數日の後長い手紙を書いて、彼のイギリス士官へ送つた。その大意は下の通りであつた。

「御手紙の着く前に、悴せがれの戦死は知つて居りましたが、その戦死の相手たるあなたの情深い御手紙を見た時の私の思は御察し下さい。通常ならば、あなたを悴の仇敵かたきといふところですが、御述懐に接しては、その仇敵が反つて悴

述懐

蘇生

の蘇生となつて、この母に手紙を寄せてくれたやうに思へます。あなたが悴の懐にあつた私の寫眞に對して、亡き母御に對する心持がするといはれるやうに、あなたの御手紙は、私にとつては、戦死した悴の手紙としか思はれません。あなたは悴を殺したといはれ、又事實その通りに違ない事は勿論知つて居ますが、殺すも殺されるも、共に各の國の爲で、人として何等の怨も仇もあるわけのない事は、お互に明白の事でせう。その怨もない者が互に殺さうとするのは、畢竟は戦争の爲ですが、これに就いては、私は何も申しません。たゞ仇といふべきあなたが私を母のやうに思ひ、私も亦あなたが死んだ悴の身代りのやうに思

畢竟

へるのは、何たる不思議の事でせう。

私には三人の男子があり、戦死したのはその末子ですが、兄二人もやはり戦線に出て居て、いつ弟と同じ運命になるとも計られませぬ。しかし私は末子の戦死した爲に、あなたといふ新たな子を得ました。戦争が濟み平和の時が來、さうして兄二人も無事に歸ることがあれば、私はあなたにもこの家へ一度來て戴きたいと思ひます。二人の兄もあなたを弟と思つて迎へるでせう。その時には、あなたは、死んだ悴とあなたと二人分の子として弟として、私の家庭にいつまでも滞在して戴きたい。その日の早く來ることを神に祈ります。

さうして最後には「汝の母」と彼の寫眞に書いてある通りに書いてあつた。

この事實だけで十分である。一々註釋を要しない。人情の美は、眞心によつて此の如く結び附くものである。

—光あれ—

二二 花えらみ

武島羽衣

少女「机の上に生けおきて、

朝な夕なにうちながめ

心の鑑ごなさんには、

いづれの花かよかるべき。」

菩薩「わがあざやかな色を見よ。

わがかんばしき香をばかけ。

君がみそばにおかんもの、

われにまさるはなかるべし。」

少女「色はありとも、香ありとも、

花のうしろに刺もちて、

人さすごきそなたをば、

いかで鑑になさるべき。」

朝顔「あしたあしたに疾く起きて、

急る日なきわれを見よ。

君がみそばにおかんもの、

われにまさるはなかるべし。」

少女「身は怠らずつこむこも、

朝日さすまも待ちかねて、

しばむがごこきそなたをば、

いかで鑑になさるべき。」

蓮「泥の中より出づれごも、

清きはわれが姿なり。

君がみそばにおかんもの、

われにまさるはなかるべし。」

少女「清き姿はありごても、

露(一)をば玉(一)に見せかけて、

欺くごこきそなたをば、

いかで鑑になさるべき。」

櫻「われが心は愛らしく、

われがかたちはしな高し。」

(一)「はちすばの
にこりにそま
ぬ心もて、何
りは露を玉と
あざむくしと
(古今集、僧正
遍昭)

君がみそばにおかんもの、
われにまさるはなかるべし。」

(一)「うら／＼と
のどけき春の
心より、にほ
ひ出てたる山
櫻花」(賀茂
真淵)

少女(一)のどけき春のま中より、
にほひいでたる櫻花。

げにおくゆかし、そなたこそ
わが朝夕の鑑なれ。」

かくて少女は花かけに、
よりよりて手折れる一枝を、
机の上の水入に、

さしてぞひごりながめける。

—續花紅葉—

二三 須磨日記

坪内逍遙

(一)兵庫縣。神戸
市のうち。

(Station.
)停車場)

七月十一日 須磨(一)の叔母様の許へ行くとして、姉様と京都よ
り汽車に乗る。空晴れて暑き日なり。神戸より先は海見え
て、沖には白帆の行違ふさま、繪のやうなり。そのうちに驛
夫が「須磨、須磨。」と呼ぶ。叔母様のお宅はステーションより
ぢきなり。「あれ、屋根が見える。」「それ、門が見える。」といふう
ちに着く。叔父様、叔母様も、よう来た。よう来た。」と幾たびも
仰せられたり。

掃く

(一)福祥寺の一名。
(二)平經盛の子。無官大夫といふ。元暦元年(一一八四年)熊谷直實に討たる。年十六。

石ぶみ

十二日 朝、叔母様、姉様と一緒に、海濱を歩いて貝を拾ひ、用



須磨寺

り。須磨寺の隣に源光寺といふがあり。その石ぶみに、

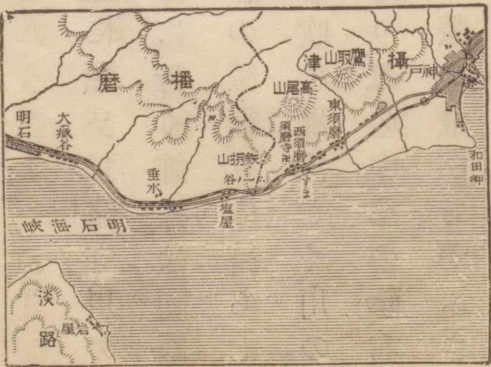
水池、月見の松の邊まで
行きて還る。姉様と貝に
ておはじきをして遊ぶ。
十三日 朝、姉様と庭を掃
く。夕がた涼しくなりて、
叔母様、姉様と三人にて
須磨寺に詣づ。まづ敦盛
の首塚といふを見る。こ
の寺には色々の寶物あ

見渡せば眺むれば見れば須磨の秋

と書きてあり、「これは芭蕉といふ人の句なり。」と、叔母様仰
せられき。

それより程遠からざる路守川の
邊まで行き、平家蟹二疋つかまへて
還る。夜はこのあたり螢多く出づる
由。

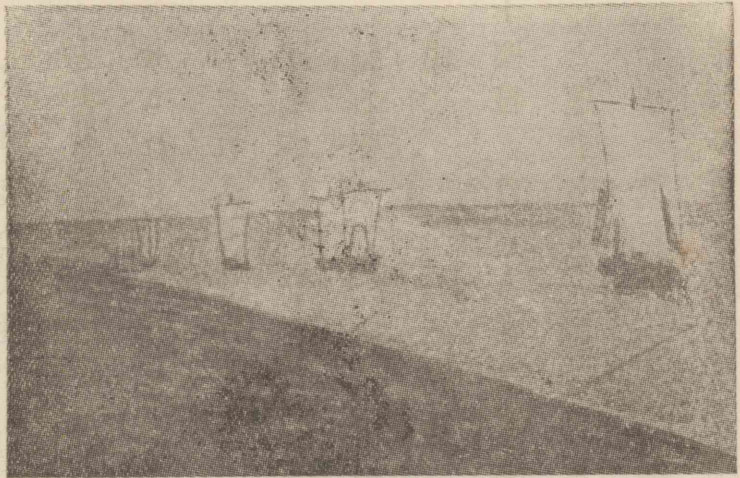
十四日 けふも朝疾く起きたり。姉様
と連立ちて、海邊へ行く。跣になりて、
わざと波に洗はず。ちよろ／＼とはひ來る波、さながら生
きてゐるやうなり。和泉の山、淡路の島など、姉様指さして



さながら

御料林

紗の螢籠



教へ給ふ。また貝を拾ひ、暑くならぬうちにとて、後の御料林の中を歸る。

須磨 夜、叔母様に願ひて、路守川の邊まで螢狩に行く。姉様は團扇の叔母様は紗の螢籠、私の持ちし海は笹竹なり。吹く風涼しく、川の岸上、橋のほとり、葦の中、草の蔭、右より、左より、螢の飛びちがふさま、誠に美し。

姉様と私と澤山の螢をとり、

叔母様は籠に入る、お役目忙しきほどにて、このやうなる面白き事はなかりき。

十五日 雷雨。閉籠りて外へは出でず。京都の友だちの許へ手紙を書く。姉様、側よりのぞき見て、をかしき事を書く子よ。とて笑ひ給ふ。姉様とおはじきして遊びし事、螢狩の事など書きたれば。

十六日 明日歸る筈ゆゑ、今日は叔母様、姉様と町へ行き、土産物を買ふ。松露の罐詰二つ、貝細工の簪二本。

この夜遅くまで話す。

— 國語讀本 —

紺青色

二三 夕立

徳富蘆花

けふ早めに夕飯を食べて居ると、北からひいやりと風が来た。眼を上げると、果して果して、北に一團紺青色の雲が立つて居る。その紺青の雲を背にして、こんもりとした隣家の杉や、檜の木立、孟宗竹の藪などが、いづれも生々しい緑を浮して居る。

「夕立が来るぞ。」

主人は大聲に呼んで、手早く庭の干物、履物などを片づける。裏庭では、婢が駈けて来て、洗濯物を取入れた。

やがて食卓から立つて妻子が下りて来た頃には、北天の

天穹

天心

(一)ヨハネ黙示録キリスト教聖書中の一篇

ひた押し

眞夏の喘

一隅に埋伏して居た彼の濃い紺青色の雲が、忽ちにむらむらと湧起つて、何の艶もない濁つた煙色に成り、見る／＼天穹をはひ上り、大軍の散開するやうに、東に、西に、天心に、ずんずんと擴つて来た。三人は芝生に立つて、驚嘆の眼を見はつて、この夥しい雨雲の活動を見た。

あな夥しの雲の勢や、黙示録に、天は卷物を卷くが如く去りゆく。と歌うたも無理はない。青空はいま南の一軸に巻きしぢめられ、煤煙の色をした雲の大軍は、その青空をすらあまさじものをと、南を指してひた押しに押しよせて居る。つい今しがたまで雨をこひしがつて居た乾き切つた眞夏の喘は、どこへ行つたか、たゞ十分か十五分のうちに、大地は恐

冥府

しい雨雲の下に閉ぢこめられて、つめたい黯い冥府冥府になつた。

雲の運動は、秒一秒劇しくなつた。南を指して流れる雲、渦まく雲、眞黒に屯つて動かぬ雲、雲の中から生まれる雲、雲を摩つて移り行く雲、濃くなり淡くなり、淡くなり濃くなり、北から東へ、東から西へ、北から西へ、西から南へ、逆流して南から東へ、世界中の煙をここに集めて、煤煙煤煙の限りなく湧くやうに、眼を驚かす雲の大行軍の音響を聞かぬが不思議である。

つめたい風がすうつくと顔に當る。後馳おくれはせに雷がそろそろ鳴り出した。北の方で、條すぢをなさぬ紅や紫の電光は、時に

天の半壁を照らす

ぱつくと天の半壁を照らして閃く。近づく雷雨を感じつつ、我等はなほ頭上の雲から眼を離し得なかつた。薄汚い煤煙色をした満天の雲は、益、南へ流れた、水のやうに、霧のやうに、煙のやうに。空はみな動いて居る。濶い空はどの一寸四方として、動いて居ないのはない。草木も人も息を屏しんめたかのやうに、一切の物音ははたと絶えた。

空はとうとう雲をかぶつてしまつた。著しく水氣すゐきを含んだ北風が、ぱつくと顔をうつて來た。やがて粒だつた雨になる。雷も頭上近くなつた。母屋の南面の雨戸だけ残して、悉く戸をしめた。暗いのでランプをつけた。

ざあつと降出した。雷が鳴る。一庭の雨脚を凄じく見せて、

ぴかりと電が光る。颯々と烈しく降出した。
見る／＼庭は水になる。雨が飛石をうつてはねかへる。目
に入る限りの青葉が一葉々々に雨を浴びて、うれしさうに
ぞく／＼身をふるはして居る。

「あゝ好いおしめりだ。」

と誰かがいふ。

「まだ七時だよ、まあ。」

妻と婢の驚いた聲がする。

夕立から本降りになつて、雨は夜すがら降つた。

——みゝすのたはこと——

自修文

二四 かんにん

柳澤 淇園^(一)

^(一)畫家。名は里
茶の。大和郡
八幡の。實曆
八年。二四一
十六。歿。年五

文盲

文字を知らな

いもの。

はべらずや

ありません

御許

あなた。

おぼしちが

ひ

おもひちが

愚昧

おろか。ばか。

或人、文盲なるものを意見して、「世のまじはりは他のことはい
らず、たゞ『堪忍』の二字をよく守るべし。」といへば、文盲の人は頭を
傾け、「かんにん」とは四字にてはべらずや。」と、指をもて數へ、「御許に
はおぼしちがひなるべし。『かんにん』と四字にてはべり。」といへば
意見せし人曰く、「愚昧の人かな。『堪忍』とは『たへしのぶ』とよみて、
二字なり。」といへば、また頭を傾け、「たへしのぶ」ならば、また一字
ふえたり、五字となりぬべし。何と仰ありとも、我等は四字と思ひ
はべれば、四字にてかんにんは致しはべるなり。」といへるに、その
人また曰く、「汝の如き愚昧の文盲は、實に諭しがたし。人に似て蟲
同様なり。おのれが氣まゝにすべし。」と大いに憤りければ、文盲の
人笑ひて、「何とも仰あるべし。我等は『かんにん』の四字を知りはべ

れば、悪口あくこうせられても少しも腹立ちはべらざるなり。とて笑ひきとぞ。

二

予が友としける平澤何某なにがしといふ士は、堪忍かねんづよき人にして、或時主用ありて、人多く具して行きける道の程にて、二階にがいより齒磨はみがきをつかひて吐きたる唾つばの、過ちて平澤が着せし上下かみしもにした、かにかゝりたれば、供人大いに憤り、その家に入り唾を吐きかけたる者を引出さんとす。平澤とゞめて、しばしこの家を借るべしとて、その家に入りて、挾箱はさみばこより着がへの上下を取出して着かへけるに、その家の者ども大勢出でてわぶるにぞ、平澤申しけるは、過あやまちなるべし。重ねて心をつくべし。とて出行きぬ。供人いひけるは、いかでそのまゝにゆるし置き給へるぞ。といへば、けふは大切なる主用なり。かゝる些細ちさかの事に隙取ひまるべきことにあらず。わが常に

上下
徳川時代の男子の禮服。
した、か
たくさん。

挾箱
衣服を入れ棒の先に通して箱の先に通して

打擲
ぶんなぐる。
いふがひなき事
いふがひなき事

さにはあらず
さうではな
い。
〔洪園の隨筆。〕

London.
(倫敦)イギリスの首府。
怪しげなる

守れる堪忍はこの事なり。といへり。その後、又私用ありて、その供人を引連れ出でけるに、折しも夏の頃溝みぞのけがれ水を打ちけるが、平澤が袴の裾すそより下をけがせり。又々供人大いに憤り、すでに打擲うちうちにも及ばんとせしを、おし止めて行きければ、供人申しけるは、いふがひなき事にて候。といふにはあらず。けふは私用にたゞ出でたり。私に人をのゝしること、士たる者の本意にたがへり。たゞ堪忍だにせば、世に耻辱ちじくといふことあるべからずといはれきとぞ。

——雲萍雜志(一)うんぴんざつし——

二五 ピエールとマリブラン その一

落合直文

ロンドンの貧民窟と呼ばれたる町はづれの怪しげなる

(Pierre) フランスの

家道日に衰

まめやかに

ひまあり

破家(あはれ)の一間に、母とともに住める一少年あり。名をピエール(1)といふ。もとより貧しきが上に、母は長く病床にありて、起臥も自由ならず。我が身はまだ幼くて、何の職業に就かん由もなかりければ、家道日に衰へゆきて、今はいかにともするこゝと能はざるに至れり。されどピエールはこれを苦しと思はず、まめやかに母の看護につとめ、ひたすらその恢復を祈れり。

けふは早一錢の貯もなくなりぬ。ピエールは朝より一片のパンをも味ははで、母の側にあり。病少しひまありと見えて、母は今安き眠に入りぬ。ふと見れば、枕頭の薬すでに盡きたり。我が飢はともかくも、母に進むべき薬をいかにせんと

心細さとゞめ難し

(Malibran) フランス人。西暦一八三〇年八月六日。女史

一枚摺



マリブラン女史

思へば、ピエールはいとゞめ難き(1)を覚えぬ。

ピエールは涙ぐみながら立上りて、窓によりつゝ外面の方を眺め居たりしが、やがて彼方より、旗差上げ、喇叭(らふ)と太鼓とを鳴らしつゝ、音樂會の廣告をふれ來る者あり。聞けば、マリブラン女史といふ當代に名高き聲樂家の、今宵さる處にて新曲

を歌ふべしといふ廣告なりけり。

ここにピエールはふと、去年マリブラン女史の歌ひし或小歌の一枚摺が、何萬枚となく賣行きしことを思ひ浮べぬ。

物心ものこころづく

飢を醫す

一面の識

默禮

ピエールは物心のつきし頃より、早くも音樂の樂みを覺えて、はては何とも分かれぬ小歌など、折々作り出でたることもありしが、この頃も母の病床に侍して看護の傍、一つの小歌を作り出せり。ピエールは今その小歌を見つゝ、あはれ若しもこれを彼の女史の歌ひくれなば、書肆も争ひて買ひもやせん。しかあらば母の藥も心にまかせ、我も亦飢を醫するこ
とを得ん。女史には素より一面の識もなければ、ひたすらに
請願はば、なか許されぬことのあるべきと思ひ迫りては、
子供氣のなか／＼に止めん由もなく、急ぎ筆を走らせて、我
が小歌を書改め、安らかに眠れる母に默禮しつゝ、街頭に出
行きぬ。

二六

ピエールとマリブラン その二

刺を通す

臆する色な

ほがらか

マリブラン女史は、とあるホテルの一室にいこひ居たりしが、見も知らぬ幼童の訪れ來て、刺を通ずるあり。見るから愛らしき十歳ばかりなる幼童、臆する色もなく、靜かに女史の前に進みて一禮せり。かくて彼はほがらかなる聲にて、我が母は久しく病煩ひて、今は藥を買ふべき錢すらも盡きぬ。このはかなき我等を憐み給はば、願はくは御身この歌を歌うて給はらずや。さらば我は書肆に頼み、一枚摺となして、それを賣歩かんと思ふ。とて、一枚の紙の卷きたるを出しぬ。
女史はそとそを取上げて默讀し居けるが、やがて驚ける

面持

うなだる
いとほし
心置なく
何くれと

面持にて、ビエールの顔を打眺め、「こをそなたは作れりとや」といひぬ。さて幾度か讀返しつゝ、こは誠に見事なる作なり。わらはは今宵必ずこを歌ふべし。そなたも來りて、わらはの歌ふを聽かれよ。」といへば、ビエールはうなだれて、「そはうれしけれど、母の一人にてあらんがいとほしくて。」といふ。母君の方へは、わらははより物慣れたる看護婦を送るべし。心置なく來よ。」とて、女史は何くれと勞り慰め、若干の金子と音樂會の入場券とを與へしに、ビエールは夢かとはばかり打喜び、母に捧ぐべき藥、食物など買集めて、家に歸りぬ。

けふの事どもを母と語らふほどに、やがて看護婦も來りしかば、ビエールは音樂會へと急ぎぬ。まばゆきばかりに磨き上げたる舞臺に、金絲の幔幕引渡したるが、さまざまなる電燈の光に輝きて、その間に立雜れる人々の衣服の上に反映せるなど、かゝることに眼なれぬ。ビエールは、たゞ驚くばかりなりき。

演奏

反映

水を打ちたる如く
寂として人なきが如し
拍手の聲雷の如く起る

幕の開くと齊しく、賑やかなる奏樂は起れり。數番の演奏終りし後、マリブラン女史は拍手の聲に迎へられて、靜かに場に上りぬ。ビエールは思はず慄おそひ始めぬ。女史は一禮して、徐に歌ひ出せり。そは眞にビエールの歌なりけり。高く、低く、緩く、速く、あはれに移りゆく歌の曲のゆかしさ。満場さながら水を打ちたる如く、聽衆の眼にはいつか涙浮びぬ。曲は終れり。満場なほ寂として人なきが如し。やがて拍手の聲、雷の

空ゆく心地

如く起れり。

ピエールは會場を出でて家路に向ひしが、たゞ空ゆく心地して、踏む足すらも定かならず。一時は書肆の事をも思ひ浮べねば、又母の事をも打忘れたり、餘りのうれしさに。

ポンド
(Pound)
一ポンドは九
圓七十六錢

翌朝マリブラン女史はピエールの家に訪れ來り、昨夜の歌をば或書肆の三百ポンドに買ひたりとて、その金子を悉く與へぬ。母はたゞ涙の外に、謝することばもなかりき。

ピエールは長ずるに隨ひて、益作曲の妙を得、後遂に名高き作曲家となれり。マリブラン女史の、ロンドンにて病みて死なんとせしをり、始終その枕邊にありて兄弟も及ばぬ看護を盡ししは、このピエールにてありきとぞ。

—中等國語讀本—

崇敬

二七 祖先

祖先を崇敬するは我が國古來の美風なり。我が國は世界の文明國中にて、最も古き國の一にして、上に萬世一系の天皇あり。下に忠良なる臣民あり。かくて皇室を尊び、祖先を敬ふの美風を生ぜり。この美風はわれ等が祖先より受けたるところなれば、われ等はまたこれを子孫に傳へざるべからず。われ等の祖先は、君には忠を盡し、父母には孝を致し、兄弟に友に、夫婦相和し、朋友に信なりき。われ等がこれ等の諸徳を重んずるは、即ち祖先を崇敬する所以なり。

家名

祖先に對する務の中にて大切なるは、家名を汚さざることなり。われ等が正しき行をなし、君のため國のため力を盡し、行を慎み、業を勵みて、家名を全うするは、祖先に孝なる所以なり。若しこれに反し、人たる道に背きて、家名を傷つくることあらば、これ即ち祖先の名を汚すものにて、祖先に對して不孝となるなり。家名の重んずべきは、門地の如何によるべきにあらず、又祖先の功業の有無に拘るべきにもあらず。祖先より傳はりたる家産を保持し、進んではこれを増殖するも祖先に對する務なり。天災、地變、疾病の如き避くべからざる事情によるに非ずして、祖先より傳はりたる家産を破るが如きは、祖先に對して大なる不孝なり。又新に一家を

興とよすものも、家産を作りてその家の基礎を固うし、以て祖先の名を全うすべし。家産は大切なるものなれば、家業に勉勵して、家産を増殖することに努むべし。されど不正なる手段によりて家産を作るが如きは、却つて祖先の名を傷つくるものなれば、堅く戒むべし。

— 國定高等小學修身書 —

二八 天長節

長き暑中休暇は終りて、新學期は今日より始る。休暇の最終日たる八月三十一日は即ちめでたき天長節なり。十月三十一日を以て天長節祝賀日と定められたれば、八月には宮中の御宴もなく、學校にて奉祝の儀式もなければ、國民はこ

佳節

かけまくも

踐祚
天資

登極

(一)大正元年七月
三十一日午前
十時朝見式の
勅語

宏謨

のめでたき佳節を忘れず、包みあへぬ喜は人々の心に充つるなるべし。かけまくも畏けれども、天皇陛下には明治十二年の御降誕にましく、明治二十二年の天長節を以て皇太子に立たせられ、明治四十五年七月踐祚あらせられたり。先皇の天資を受けさせ給ひて、御幼時より明敏におはし、皇太子殿下として、年々各地方を巡啓ありて、民情を見そなはし給へり。登極の初、群臣を召して下し給へる勅語の中に、
朕今萬世一系ノ帝位ヲ踐ミ統治ノ大權ヲ繼承ス祖宗ノ宏謨ニ遵ヒ憲法ノ條章ニ由リ之レカ行使ヲ愆ルコト無ク以テ先帝ノ遺業ヲ失墜セサランコトヲ期ス有司須ラ

和衷協同

獎順

ありとある

Europe.
(歐羅巴)

ク先帝ニ盡シタル所ヲ以テ朕ニ事ヘ臣民亦和衷協同シテ忠誠ヲ致スヘシ爾等克ク朕カ意ヲ體シ朕カ事ヲ獎順セヨ
と仰せられたる、畏しとも畏し。
ここに最も恐多きは、二三年この方、聖上御病にかゝらせられ、ありとある名醫の治療に手を盡したてまつれども、いまだ全く平癒ましまさぬ御事なり。よりて大正十年十一月皇太子裕仁親王殿下は、帝國憲法第十七條及び皇室典範第二十六條に據り、攝政とならせ給へり。殿下の聰明叡智におはしますことは、夙に世の知るところにして、大正十年にヨーロッパ各國を御巡啓あり、御見聞を廣くし外國との交際

萬機至情

をも厚くし給ひしは、内外の國民こぞりて我が國の慶事と
たゞへたるところたり。今や東宮殿下は天皇陛下に代りて
萬機を攝し給へば、國民には心強きことなれども、至情とし
ては、聖上御病惱の一日も早く御快癒あらせられんことを
祈らざる者なかるべし。天長節に會ひて、この感いよく、深
し。

自修文

二九 暴風警報の利用

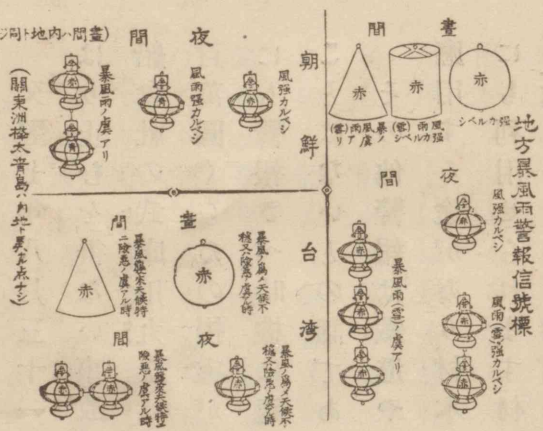
藤原 咲平

暴風警報の爲に最も利益を得るのは、艦船であります。大阪商
船會社の海務課長の御話によりまするに、警報は航海上なくて
ならぬ事は言ふまでもない事で、その進行方向などの通知は、た

(一) 理學博士。長
野縣の人。中央
氣象臺技師
(二) 明治十七年設
立。

高低氣壓
高氣壓と低氣
壓の區別は、
晴雨計に於て
空氣の壓力を
六(六)ミリの
トルミ、それ
よりも高氣
壓、それより
下、それが低
氣壓、それが
いそがしき暴
風が起る。

示度
(一) 中央氣象臺の
こと。暴風警
報、天候豫報、
地震の觀測等
の事を掌る。
東京にある。
適切
最もよくあて
はまつた。
不可抗
どうしても防
ぐこと出来
ないこと。
測候所
氣象の觀測を
し、天候豫報
や暴風雨の警
報などを出す
所。



とひ缺けて居つたにしても、高低氣壓の現在の位置と示度を正
しく知れば、熟練な船長は十分に風波の難を避け得るさうであ
ります。船が大きくなれば、沈没といふ
やうな事はめつたにないが、暴風には
必ず多少の損害を受け、又發着の日取
などが狂はせられます。

大正六年十月一日の暴風雨の時に、
氣象臺では適切な警報を發し、各府縣
で皆それに依つて適切な警報を發し
ましたが、不幸にも不可抗の事情で、警
報が測候所長に届かなかつた縣があ
つたことがあります。漁船千艘失つても、少くも五六十萬圓の損害

延着
おくれつつ

時機
ちやうどよい
時

筏
水に流して運
ぶ爲に木や竹
を組合はせた
もの

にはなりません。のみならず、遭難には人命を失ふことが多いのであります。

又翌七年八月三十一日の暴風雨の時には、氣象臺の警報がやはり止むを得ない事故の爲に延着し、爲に瀬戸内海だけでも、商船會社の武庫川丸をはじめ六七艘の汽船が遭難し、少くも五六百萬圓ぐらゐの損害があつたと申します。今日では大概の暴風にも、警報さへ時機に適して受取られ、ばまづ遭難するやうなことはないとの話であります。

その他警報は鐵道や土木等の事業や、軍事、航空、消防、農蠶等に應用する途があり、材木商、魚類商、それから養魚池などの事業家にも利用せられます。材木に何として警報が入用かと申しますに、筏にして河に繋いであるものが洪水で流れると、忽ち數十萬圓の損をする。それで暴風が來るとなれば、流さないやうに手當

大じけ
大暴風。

(一)大正三年から
大正七年までの
世界大戦

いたづらに
無益に。
一たまりも
ない
すぐにやられ
てしまふ。

をするのであります。養魚池では、洪水をかぶれば魚は皆逃げてしまひますが、暴風前に池から上げて置けば、大じけの後で魚の價がうんと上るから、却つて大まうけとなります。

軍事上には最も應用の途があります。昔孔明といふ支那の有名な大將が、天文を知つて居つたとか、風を祈つたとか傳へられるのも、恐らく氣象上の知識を有したことから思ひます。先程の大戦前までは、よく天氣など分つたとて、し方がない。軍隊では一度出した命令は、たとひ雨が降らうと、槍が降らうと、變更せらるべきものでない。といふ風にも解せられた向がありましたが、大戦後全く一變しました。やはり天候の變を豫知して計畫を立てれば、いたづらに兵を苦しめることもなく、勝敗の結果にもひびいて來る。殊に航空となつては、どんな大型の飛行機であらうが、暴風に遭うては一たまりもない。そこで飛行隊でロンド

天氣圖
天氣のあらゆる
を圖にあらは
したものを
公刊す
おほやけに發
行する
公表す
一般に知らせ
る

ンを襲ふなどとなると、是非とも天氣の形勢が分らないと出來ない。その爲に、初めイギリスでは天氣圖を公刊して居りました。が、敵國に天氣を知らせるおそれがあるので、一般の利益を犠牲として、戰爭半ばから一切天氣のことをば公表しないことにした。これで見ても、いかに天氣のことが戰爭に必要だか分りませう。又毒瓦斯を使ふには、天氣豫報が出來なければ危険でやれない。と申すのは、若し戰爭途中で風が變れば、今まで敵の方へ吹送つた瓦斯が、却つて身方を悩ますことになるからであります。軍艦にも警報が入用であります。殊に潜航艇には必要であります。潜航すれば風波の難は減じますが、さういつまでも潜航することは出來ないから、やはり警報を得る必要があります。一般の人々の爲には、旅行、登山等の際には、是非とも警報に注意せられることをお勧めします。山中の遭難の大多數は、暴風の

懸念
しんぱい。
陸奥國東津輕
郡青森の津
八尺海抜の南
東一尺海抜の
三八一尺海抜
三十一尺海抜
青森縣中隊一
部の際、雪中行
した。二百餘死

爲であります。暴風は山上では平地よりも早く且烈しく、又多くは冷氣を伴ふので、その爲に凍えるのが多い。豫め警報に注意して、天候に懸念ある時には、登山等は控へるが一番であります。嘗て八甲田山で兵士が遭難したのなども、暴風といふほどではないが、雪の爲であります。冬期などは、特に雪國では天氣に注意すべきで、いくら元氣を出しても、天然の不可抗力にはかなふものではないです。 — 氣象事業と其應用 —

三〇 大阪

なには津に咲くやこの花冬ごもり
今を春べと咲くやこの花
古は浪速と呼び、今大阪と稱して、人口百二十五萬に上る

商況

布置



(一のそ) 景全市阪大

本邦第二の大都會。海内無双の商業地として、市街の繁盛、商況の活潑、首府東京にも優るかと思はれる。旅客一たび大阪驛に下れば、家屋の構造、市街の區劃、道路の布置、市民の風俗、また全く一種の商業的趣味を帯びてゐるのを發見するであらう。地勢は概して平坦であるが、東部一帯は稍隆起して、低き丘陵性の臺地をなして居る。市域東西二里十九町、南北二里二十四町、面積三里餘、東、西、南、北の四區九百十三町に分

金融市場

(一)第十六代。

いはずもが
なほ残つて居る。
仁徳



(二のそ) 景全市阪大

れて居る。古來安治川以北を天満、蜷川以北を北の新地といひ、中央部を船場、島之内と稱し、南部は難波新地といひ、西部には堀江、立賣堀、阿波座があり、その最も繁華なのは船場、島之内で、淀屋橋通、心齋橋通が、特に繁昌を極めて居る。船場には銀行、問屋が多く、市の金融市場を爲し、堂島、中之島には官衙が多く、京町堀附近には幕府時代に於ける大阪風の繁華がなほ残つて居る。仁徳天皇の高津宮の古はいはずもがな、豊

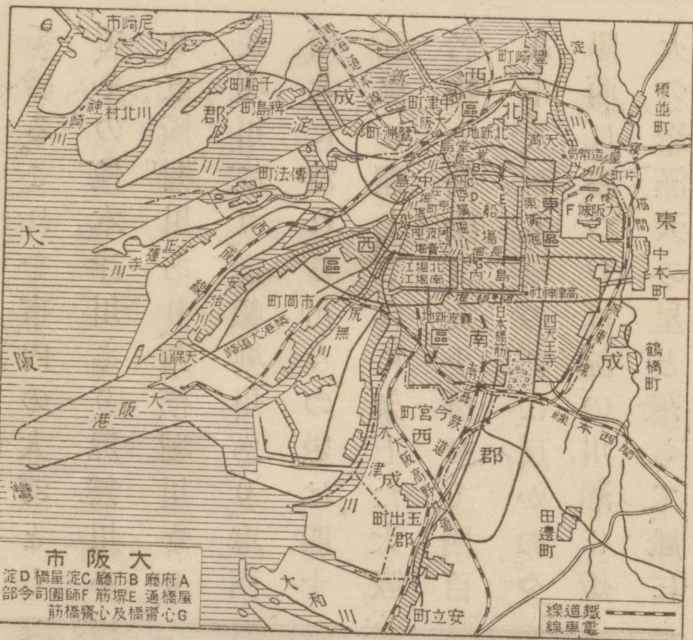
(一) 大正十一年。

波及す

臣秀吉がここに城^(一)を築いて天下に號令し、また天下の豪商を集めてから頓に繁華になり、豊臣氏の亡んだ後も、なほ全國商業の中心地となり、各藩の物産交換の大市場として、この地の物價の一高一低は、直ちに全國に波及したのである。王政維新の後も、關西の經濟界、商業界は全く本市によつて左右せられ、その海外貿易額も、大正十年には輸出二億九千二百萬圓、輸入一億一千九百萬圓に上り、輸出は全國總額の二割三分、輸入は七分を占めて居る。中にも工業の盛なことは我が邦第一で、工業會社、諸工場多く、煙突から吐く煤煙は全市をこめて、「煙の都」と稱せられて居る。

舟楫の便

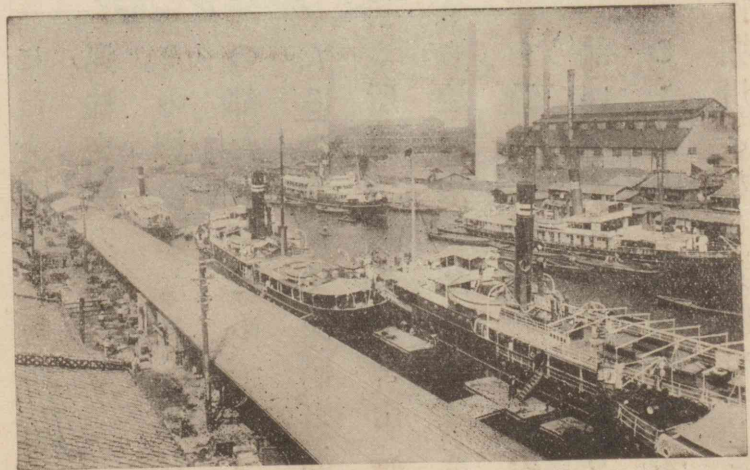
市内には大小の河川が四通八達して、舟楫の便を備へ、西



二流に岐れて堂島川となり、土佐堀川となり、共に西南に奔

夕陽西に春
づく

り、末また合して安治川となつて居る。これを市内の大河として、その他木津川あり、尻無川あり、東横堀川あり、西横堀川あり、長堀川あり、道頓堀川あり、東西南北に流れる川々の數は四十五條に達し、これに架した大阪名物の橋梁は、大小併せて四百八十、八百八橋の稱に反かぬ。夕陽西に春づけば、淀の川瀬に燈火の影滿天の星と落ちて、風に



大阪安治川口

往くさ來さ

故老

ゆられる柳の絲の、招く手振に月もほのめいて、往くさ來さの涼舟、目もくるめかんばかりである。

舊幕時代淀川の小さい三十石舟に靜かな夢を載せて、寢ながら伏見に着くのを無上の便利と考へたのも、今は故老の物語となり、水の都の大阪は、蜘蛛の巢のやうに敷設せられた鐵道によつて、一入利便を感じることとなつた。京都から梅田の大阪驛を経て神戸に至る東海道線をはじめとして、關西線があり、片町線があり、福知山線があり、城東線があり、西成線があり、その他南海鐵道があり、大阪高野鐵道があり、線路交叉複雑して、旅客をして行く手に惑ふの感あらしめるのである。

—鐵道旅行案内による—

線路交叉す

三一 鳥の美

飯島魁

風致

山容水態

藝術題材

貧弱

風致といふものは、單に山の形や、水の姿や、それに美しい色彩の美を與へて居る植物などばかりで組成せられて居るのではない。山容水態がいかに麗しくても、綠樹彩花がいかに美しくても、その間に動く何物かがなければ、風景は生きた趣を生ぜぬ。昔から花鳥といふ文學、繪畫、彫刻、音樂等あらゆる藝術には、花と鳥が重要な題材とせられて居る。殊に吾が國の繪畫や、詩歌には、花と鳥が主要な地位を占め、その中から花鳥を除き去つたなら、非常に貧弱なものと成つてしまふ。

(一)古今集の歌、
讀人知らず。

單調
あしらふ

(二)奈良春日山の
麓。

(三)武藏國の大平
原。

美觀

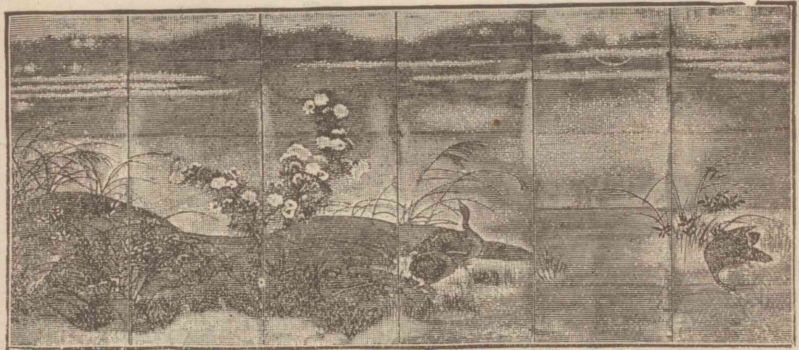
(一) わが宿の池の藤波咲きにけり

山ほととぎすいつか來鳴かん

といふ通り、花だけ、鳥だけでは單調である。花に鳥をあしらひ、鳥に花を結びつけて、始めて複雑な美が成立する。「梅に鶯」「卯の花にほととぎす」「蘆の花に雁」といふ風に、四季それぞれの花には鳥が附屬物となつて居る。

獨り鳥のみならず、あらゆる動物は皆かく風致に美を加へて居る。禽獸蟲魚は昔からの畫題であり、詩材である。春日野から鹿を奪ひ、武藏野から蟲を除いたならば、その春の旦、秋の夕の景色は、どれだけ無味なものと成るであらう。それ程に美觀上の價值あるものを、人間が勝手氣儘に捕殺する

(一) 鶯の笠に
花ふ折て梅の
ざさんら老りかく
るやとし古
今集東三
左大臣條

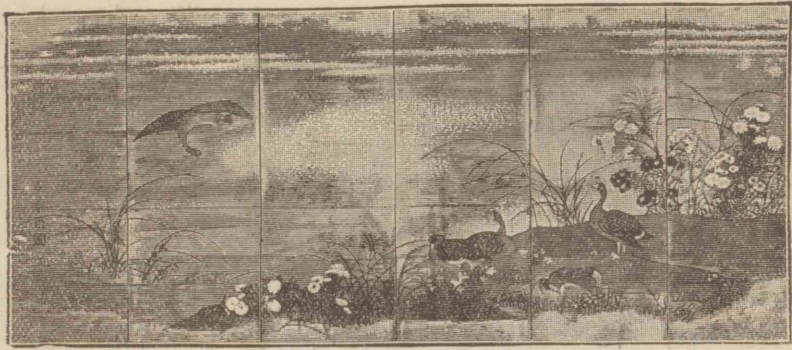


圖の雁蘆

權利をもつて居るであらうか。分り易
くいへば、狩獵税を出しさへすれば、そ
れで勝手に鳥獸を殺してもよいであ
らうか。吾々が擅はしに鳥獸の命を絶つそ
の結果は、一年や、二年では現れて來ま
いが、五年の後、十年の後は如何。更に二
十年、三十年の後には、吾々の見た美し
い鳥も、珍しい獸も皆姿を隠して、吾々
の子孫はそれを見ることが出來なく
なりはすまいか。鶯(一)の笠に縫ふてふ梅
の花。」とある鶯は、どんな鳥であらうと

ゆゝしい

誇大の言



(筆 信 光 佐 土)

いふやうな事に成るかも知れぬ。かう
なればゆゝしい一大問題である。吾々
は吾々の見た鳥や獸を、やはり子孫に
遺して、子孫にも楽しませてやりたく
思ふ。
これは誇大の言ではない、日本の鳥
類は今將に全滅せんとしつゝある。去
年と今年とを比べて、その間の差異を
發見することは困難である。しかし今
日と十年前、二十年前と比べて見ても、
その間に非常な差異のあることを何

過去を以て
將來を推す

現象

觀察

歴史的にな
る

人も感知するであらう。過去の變化を以て將來を推せば、十年後、二十年後にどういふ現象を呈するであらうか、今から豫め想像するに難くない。廣い世界の目から觀れば、滅亡した動物は無數である。狭い日本だけで觀察しても、すでに滅亡して歴史的になつたものが、いくらかもあるのである。

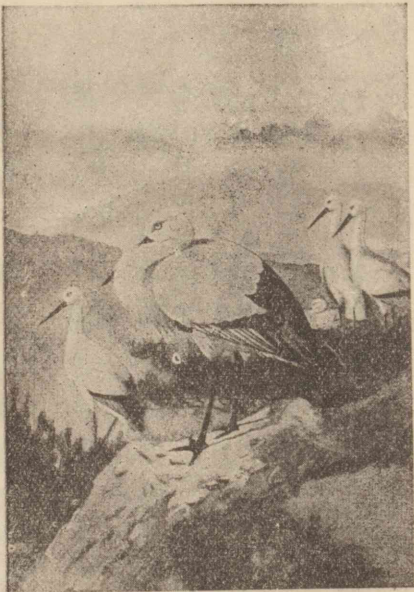
諸子は美しいとき色の色彩を知つて居るであらう。しかし今はとき色こそあれ、その色にこの名を負はせたときといふ鳥は居ない。とき色とは、その色がときの羽色に似て居るから附けられた名であるが、この鳥は最早全滅して、その姿を見ることが出来ない。蘆田鶴あしたづるの千代呼ばふといはれた江戸の千代田城は勿論、江戸附近には多く鶴が居たもので

聖人

孔子
釋迦

(一)京橋區。
(二)天恩山羅漢
寺も本所
緑町五丁目
にありしは
他へ移れ
り。
釋迦の死後
其の遺體
を結集す
る會所を
思案投首
とす

あるのに、維新後はその影をだに見ることが出来なくなつた。こふのとりの昔は澤山居た。淺草の觀音へ行く子供は、皆



こふのとりの

こふのとりが見られるといつて喜んだものである。築地、淺草の両本願寺(二)、本所の五百羅漢の屋根の上には、うよくす

が居たが、今は早全國一般に居なくなつた。鷺の滅つたことも夥しいもので、昔は到る處の水田に水鏡を映して、思案投首の白鷺を見ることが出来たが、今日では御獵場以外これ

を見ることは出来ない。これはほんの二三の例である。その他あらゆる鳥類は、日本から姿を隠さうとして居るのである。誠に風致の上から観て、ゆゑしい一大問題ではないか。

青い月夜

落谷 虹兒

青い月夜を海ご見て、

ぼんやり見える教會が、

乙姫さまのお城なら、

わたしや人魚になりませう。

青い月夜を海ご見て、

ぼんやり見える松の木が、

珊瑚の枝であるのなら、

わたしや真珠になりませう。

青い月夜を海ご見て、

ぼんやり見える花園が、

若布や昆布であるのなら、

わたしや小魚になりませう。

乙姫
龍宮に住んで居るお姫さま。龍宮とは海の底にあつて居るといふ宮殿のこと。

(一) 蕨那郡。岐阜市の東二十二里。

青磁
逸品

三二 蕨山直女下婢の過失を救ふ

直女は美濃岩村藩の老臣蕨山某の女なり。才あり、智あり、仁慈の心特に深かりき。

直女の父盆栽を好みて、多くの奇樹珍木を蒐めけるが、中にも青磁の鉢に栽るたる梅の古木、その器、その樹と俱に天下の逸品として、自らも誇り、人も稱ふるところなりき。

一日、年若き婢女、庭に出でて、盆栽に水をそゞぎゐたるに、飼犬の赤來りて、裾にまつはり、袖にじやれつくに、婢女は戯に「しつ。しつ。」と言ひつゝ、軽く逐へば、赤走り去りて、振向きさま、一聲「わん。」と吠えて、又飛びきたる。

婢女なほも「しつ。しつ。」と叱りつゝ、小石をひろひてちやうと投付けたるに、その石はたと腰掛臺の角に當りて、横に逸るゝ途端、忽ち憂然として響あり、あはれ青磁の鉢は二つになりて、左右に割れたり。婢女見てあなやと驚き、鉢を見詰めしまゝ、あきれて立ちけるが、やがて我に返ると齊しく、一聲高く「わつ。」と泣出しぬ。

直女時に縁側に在りて、繪本を披き見つゝありしが、婢女の泣聲を聞きて、いぶかりつゝ庭に降りて、傍に進み寄る。忽ち目に留りしは青磁の鉢。餘りの事に我を忘れて、その故を詰り問へば、婢女泣くゝ「仔細を語り、いかに粗忽とは申せ、世にも稀なる御品を壊し候うては、死すともその罪を贖ひ

我を忘る
粗忽

途方に暮る

出仕

莞爾

難し。いかにせば宜しきやらんと、唯々途方に暮れ候ひぬ。」と述べ、顔を掩ひて、又さめくゝと泣く。直女聽きて心に憐み、首傾けて、何事をか思案すること少時。やがて「安心せよ。わらは善きやうに計らはん。」と言ひて、婢女を誡め去らしむ。

折しも父は出仕して家に在らず、夕刻に至りて歸り來り、晚餐終りて後、直女を相手に、いと機嫌よげに笑ひ興ず。直女は父が最愛の女なり。父は愛敬滴るばかりなる直女の顔をのぞきて、「嬢よ。其方は父が大切の娘ぞ。」と言ひつゝ、頭を撫づ。直女は眞珠の如き眼を張りて、じつと父の顔を見上げ、「さやうにてはおはすまじ。わらはよりは青磁の鉢こそ御大切に

にじり出づ

「何とてさやうの事あらん。」と言へば、直女「さらば彼の鉢わらはに賜はり候ひなんや。」と言出づ。父は幾度か打ちうなづき、「おゝ、其方の望むものは、何にても取らすべし。」とて、益機嫌よし。今は心安し。直女後に侍る婢女を見返りて、それ早くおわびを申せ。」と言へば、婢女恐るゝにじり出で、両手を突きて、頭を下ぐ。直女傍より共に詫ぶれば、父ははたと膝を拍ちつゝ、さてはこれなる女め、青磁の鉢を壊せしよな。好し好し、此度は赦し遣らん。」と告げ、前に平伏せる婢女を見遣りて、「其方はよき主人を持ちて仕合せぞ。以來よくゝ氣をつけよ。」と誠めしばかり、復その罪を問はず。婢女うれし涙に咽びつゝ、幾回か主人を拜し、直女を拜すれば、直女亦うれしき餘

りて、わつと泣崩る。直女時に年十三ばかりなりき。

—熊田葦城の文にふる—

三三三 春夏秋冬

一

空も霞みて、	さほ山の
さくら花さく	永き日に、
さへづる鳥の	聲聞けば、
春の喜	はてもなし。
柳の緑	菜の花の
あや織る野邊に	旅寐して、

(一) 照りもせず
ぬ春の夜の
おほる月夜に
しづくものぞな
き。(古今集)
集大江千里

風情

いさゝ小川

(一) 曇りもはてず
月を見るこそ

照りもせぬ
うれしけれ。

二

ほごゝぎす鳴く

森かげに、
咲出づる

卵の花白く

眺こそ、

夏の朝の

風情あれ。

春にもまして

行水に

晝の暑さを

ゆふ涼、

流して庭の

水の面を

いさゝ小川の

うれしけれ。

螢飛ぶこそ

三

いつか夏去り、

(一) 秋來ぬご

目にはさやかに

見えねごも、

風の音にも

静けさの

こもりて、秋は

もの寂し。

萩のうねりに

散る露を、

命ごたのみ

鳴く蟲の

聲もふけ行く

夜半の窓、

書を読むこそ

うれしけれ。

四

林まばらに

葉は落ちて、

(一) 秋來ぬと目
見えねごもに
風の音にぞ驚
りけれぬ。
(古今集、藤原
敏行)

(二) 白露をこぼ
りさぬ秋のうね
り。
(芭蕉)

あす

そだ

(一) 風雪の句。雀のうれしげにふさへづるをい

寒げに見ゆる

裏の大川

橋の脚いご

雪降りつもる

ろろりにそだを

親はらからの

語り合ふこそ

鳥の宿

水あせて

高きかな

家の外

折りくべて

ながき夜を

うれしけれ

三四 一年の折々

(一) 元日や晴れて雀の物語。老いたるも、若きも、麗にさし上る初日影を仰ぎ見て、大御代の新年を賀ぎ合ふ。三箇日の朝なく、雑煮

自修文

風俗

昔おもほゆ

七日の粥は七

菜の粥とて若

菜の粥とて若

菜の粥とて若

菜の粥とて若

菜の粥とて若

菜の粥とて若

菜の粥とて若

菜の粥とて若

菜の粥とて若

菜の粥とて若

菜の粥とて若

菜の粥とて若

菜の粥とて若

菜の粥とて若

菜の粥とて若

菜の粥とて若



の餅を祝ふも、古き風俗とてうれしく、七日の粥にも若菜つみけ

ん昔おもほゆ。松の内もいつしか

過ぎて、八日よりは学校の授業も

始る。今は年の中の最も寒き時に

て、五日の頃より二月二三日の頃

三四 一年の折々

一四五

て居るが、す
みすみはまた
寒はたなくは
あらず
ないこともな
い
(一)明治三十八年
三月十日
偉勳
おほきなてが
ら
しのばしむ
おもひださせ
る
(二)春分の日
御先祖の祭
は秋分の日
に祭る
ふ
皇靈祭とい

まぐまに残る寒さや梅の花の感はたなくはあらず。
 雛遊は三月三日にする習にて、桃の咲く頃なれば、桃の節供と
 もいひしが、今の曆にては花の蕾なほいと固し。三月十日は奉天
 占領の陸軍記念日にて、永く勇武なる軍隊の偉勳をしのばしむ。
 春分は二十一・二日の頃にて、晝夜の長さ相同じ。俗に彼岸の中日
 といふ。即ち春季皇靈祭の日なり。中日の前後各三日をあはせて
 七日の間を彼岸といふ。これは秋も同じく、秋の彼岸の中日は秋
 季皇靈祭の日に當る。春の彼岸は稲種をひたす時、秋の彼岸は麥
 を蒔始むる節なり。諺に「暑さ寒さも彼岸まで」といへり。
 早くも咲出づる彼岸櫻をさきがけにて、四月は野も山も花の
 雲なり。五月の一日又は二日を八十八夜といふは、立春より數へ
 て八十八日目の意なり。苗代の苗漸く伸びて、青き疊を敷けるが
 如し。古人の句に、

(一)蕪村の句を色
紙とは歌を
紙と四角の
で、彩色も
し、彩は昔
は歌よむと
は、歌よむと
苗代を色紙
に見立てた
ある
(二)明治三十八年
五月二十七日
梅雨
つゆ。

星祭
たなばたとい
ふ星を祭る
祭ともいふ
残暑
夏が過ぎて秋
のあつさ

(一) 苗代の色紙に遊ぶ蛙かな



五日は男の子の節供として、鯉幟の空高く翻るも勇ましく、二十七日は日本海海戦の海軍記念日なれば、學校にて海戦の講話を聞くも思出多かるべし。

星祭 (江戸時代)

六月十日の頃より梅雨の節に入り、連日の鬱陶しさ堪難けれど、農家には大切なる雨なり。六月二十五日は皇后陛下の御誕辰にて、この日を天長節に對へて地久節と申し奉るも、臣民の至情にこそ。七月七日の夕は星祭の笹竹にぎはしく、盆の三日の夜の精靈祭には、燈籠の火影ものあはれなり。

八月の中頃は曆にては立秋の節に當れども、處によりては殘

しづ心なし
 安心しておち
 ついて居られ
 ない。居られ
 (一)伊勢神宮。
 (二)天子が新穀を
 天照大神にた
 てまつられる
 祭式。
 (三)新穀を始め
 神に奉り天子
 もまた召上ら
 れる祭。
 年の市
 正月の入用品
 を賣る市。
 親の用に云
 云
 太祇の句。

丁年

暑の暑さの暑中にまさること、餘寒の寒さの寒中より厳しきが如し。八月三十一日は天長節なり。立春より數へて二百十日、二十日頃は暴風雨多ければ、農家はしづ心なし。いつしか新穀も實のりて、神宮の神嘗祭は十月の十七日ぞかし。十一月二十三日の新嘗祭も過ぎて後は、霜置き霰たばしりて、日も次第に短し。十二月の末残る日數ふるばかりになれば、處々に年の市など立ちて、人々は復新年を迎ふるに忙し。

親の用にたつ子幾人年の暮。

——國定高等小學讀本——

三五 愛國婦人會

明治維新の後、全國皆兵の令を布かせ給ひ、丁年に達せる

おきて

國武揚る

世界の耳目
を驚かす

豈……べけ
んや
組織

癡兵

恤兵

弔慰

慰藉

男子をして、悉く所定の兵役に服せしむる事におきて給へるは、我が國上古の舊制を復し給へるに外ならず。國武ここに於てか揚り、明治二十七八年及び三十七八年兩度の大戰役に於ては、空前の大捷を得て、世界の耳目を驚かすに至れり。

帝國の女子豈徒にして止むべけんや。愛國婦人會の組織は明治三十四年を以て成れり。この會の事業は、戦死者並びに准戦死者の遺族及び癡兵の救護を目的とするものにして、戦時に於ては軍隊の慰問、送迎及び恤兵品の寄贈、軍人家族及び傷病兵の慰問、戦病死者の弔慰、並びに遺族の慰問、軍人家族及び遺族への授産、幼兒の保育、遺族及び癡兵の慰藉

適應
内顧の憂

等、軍國の婦人として適應なる事業に盡力し、遠征の將卒を
して内顧の憂なからしめんことを期するにあり。要するに、
劔銃をとりて戦場に出でざる代り、内に居て國民皆兵の義

發動



奥村五百子銅像

務を分たんとする愛
國心の發動は、即ちこ
の會を成立せしめた
る所以にして、能く我
が國婦人の大和魂を

發揮せるものといふべし。

この會を主唱創設せしは、肥前唐津の人奥村五百子なり。
五百子は明治三十三年清國事變に際し、本願寺慰問使の一

所見

朝野

(一)岩倉具定夫人
久子

趣意書

(二)東京市麴町區
山下町

(三)載仁親王妃智
惠子殿下



閑院宮妃殿下

行に加りて支那に赴き、具に將卒勞苦の情態を視察し、その
慰藉及び戦死者遺族救護の切要なるを感じ、歸朝の後親し
く東伏見宮、閑院宮及び同妃
殿下に拜謁して所見を陳じ、
なほ朝野の人々に説きてそ
の賛同を得、三十四年三月岩
倉公爵夫人を會長として趣
意書を發表し、同七月各地方
長官を華族會館に招きて、各府縣に支部を設くるの議を定
め、尋いで雑誌を發行し、基金の制を定めたり。三十六年三月
閑院宮妃殿下總裁とならせ給ひ、會務益揚れり。今や會員の

數百二十萬を越え、資産三百五萬圓に及ぶ。主唱創設の功は五百子に在りといへども、我が國婦人の愛國の至誠に頼るに非ずんば、いかでかこの盛況を見るを得んや。

明治三十七八年戰役に際しては、この會の活動最も著しく、精神的に將卒を鼓舞し、物質的に遺族に惠與する等、その功甚だ大なりき。宜なるかな、論功行賞の時、各支部にも金銀盃を賜ひてこれを表彰せられしことや。主唱者奥村五百子は明治四十年病歿せしが、勳六等に叙してその功をしるし給ひぬ。東京九段坂下愛國婦人會本部の構内には、五百子の銅像あり。

宜なるかな
……ことや

三六 明治天皇の御遺物を拜すその一

笠井信一

(一)大正二年一月

權殿

先月十七日、宮中より地方長官一同に午餐を賜ふ旨仰せ出されましたので、定時に參内致しましたところが、十一時過權殿參拜を許されました。權殿と申すは、崩御の後一年間皇靈を祭らせられる宮中の御室でございます。即ち私どもはこの度、先帝の皇靈を拜する特別の御恩典にあづかつたのでございます。そこで、私どもは長い廣い御廊下に整列致しまして、宮殿奥深く權殿に詣つて、一人づつ最敬禮を致しました。蓋しその瞬間は、何人と雖も一種の靈感に打たれな

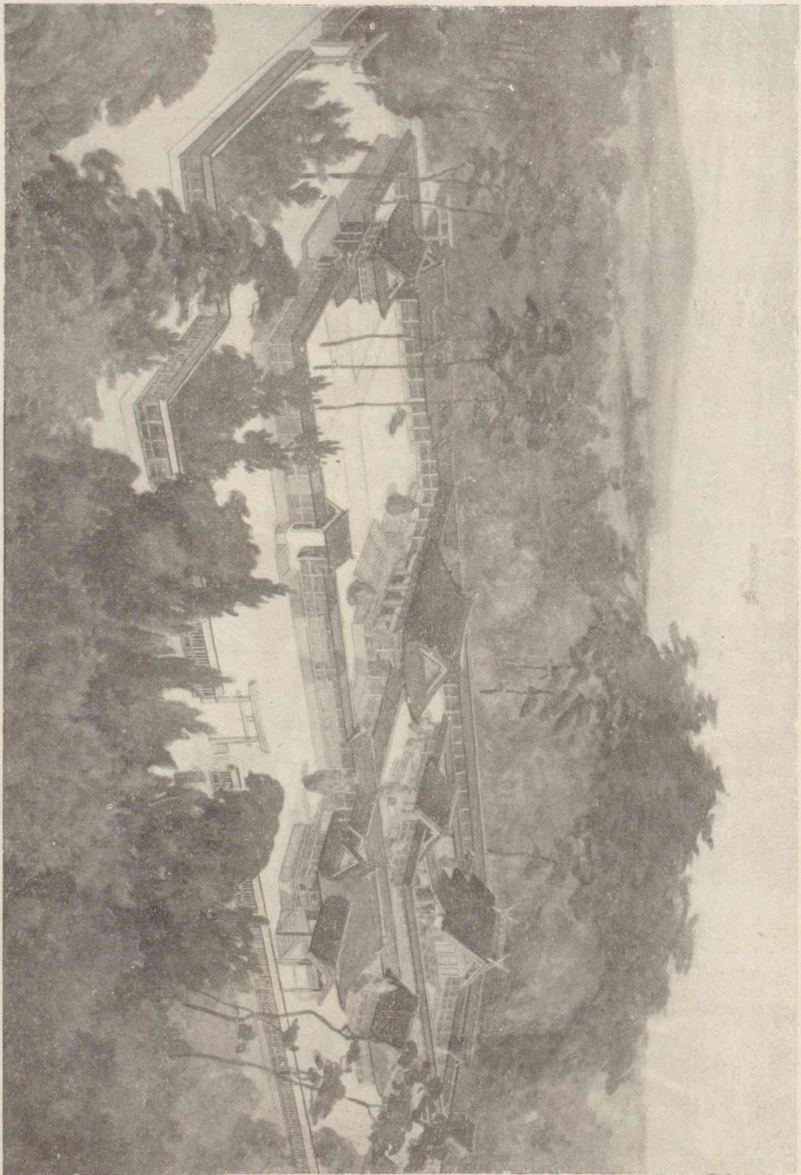
靈感

い者はなかつたのでございませう。その權殿と申すは、平素

皇后陛下の謁見所たる桐の間を以て、これに充てさせられたのでございました。

それから更に奥殿に進みまして、御學問所を拜觀致しました。御學問所は表御座所とも申し上げ、萬機の政を御親裁遊ばされる處でございます。先帝には永くここに在らせられて、徳教をお布きになり、大憲をお定めになり、或は國交をお修め遊ばされ、時に或は膺懲の師を起させられる等、宏謨雄圖一にこの中でお定め遊ばされたのでございます。然らばどんなに御立派な御部屋かと申すに、實に意外なことで、平常私どもが參内の節、休息を許される御部屋の方が却つて遙かに御立派である。しかも餘り廣くない二間續の御部

徳教を布く
膺懲の師
宏謨雄圖



宮 神 治 明

瀟洒

屋であつて、瀟洒たる檜の木の白木造ではあるが、別段これ



れたまゝのものゆゑ、後には色も大分褪めて参りましたが、お許がなくて、遂に
で、侍臣からお取替を屢願ひ出ましたが、お許がなくて、遂に

と申す御装飾も遊ばさ
明れてない。御
治も、御椅子
天も、實に御質
皇素なもので、
絨毯じゆたんの如きは
當初敷か

今日に至つたのださうでございます。

御部屋は三方壁を以て廻らし、南の一方に硝子戸があり、御机は御座所の中央に、南向にお据ゑになつてあります。この御構造を拜観すると同時に、夏分はさぞお暑いことではせられたらうと感じましたが、先帝にはお暑さのお厭もなく、連日ここに出御あらせられたのでございます。これについて、

年々に思ひやれども山水を

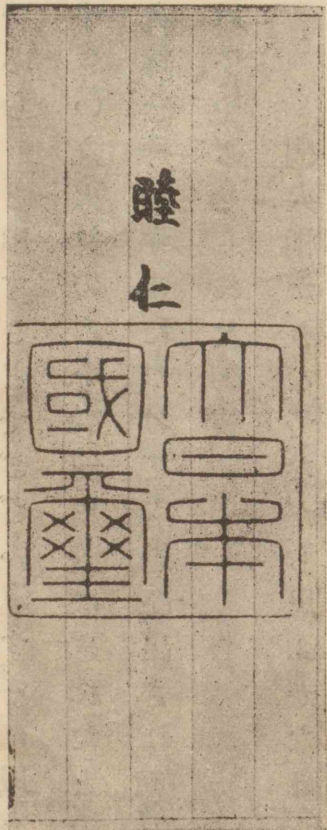
くみて遊ばん夏なかりけり

の御製を想ひ起して、誠に恐懼に堪へませんでした。それのみならず、この御部屋にはストーブの御設がございますけ

す
恐懼に堪へ

〔明治三十七年〕

れども、^(一)三十七年の冬以來、お用ひがない。窃に承るに、その年の冬の或朝、例の如くストーブに火が焚いてございました。が、先帝が出御遊ばすや否や、「火を消せ」と仰せられる。侍従は



明治天皇御璽

何故か分り
ませんが、た
だ仰のまゝ
に火を消し
ました。さて

大御心

その後と申すものは、いかなる酷寒と雖も、一切ストーブの御使用をお許し遊ばされなかつたとの事でございます。これは勿論大御心のほどを伺ひ奉るわけには参りませんが、

$$1 + \frac{7}{3} + \left(\frac{7}{3} \times \frac{8}{5}\right) = 7\frac{1}{15}$$

$$15 \times 7\frac{1}{15} = 154\frac{7}{15}$$

斯民

賤が伏屋

侍従方の推測し奉るところでは、當時皇軍が滿洲の野に大敵と戦ひ、飢寒に苦しんで居るのに御同情を垂れさせられ、兵士と艱難を共にせんとの御仁心に出でさせられた次第であらうと申すこととでございます。それ以來は、たゞ一個の小さい丸火鉢のみを御使用遊ばされたとの御事。今その御火鉢を拜觀するにつけても、思ひ出されるのは、斯民の上を思ひやらせられた御製、

桐火桶かきなでながら思ふかな

すきまおほかる賤が伏屋を

でございます。

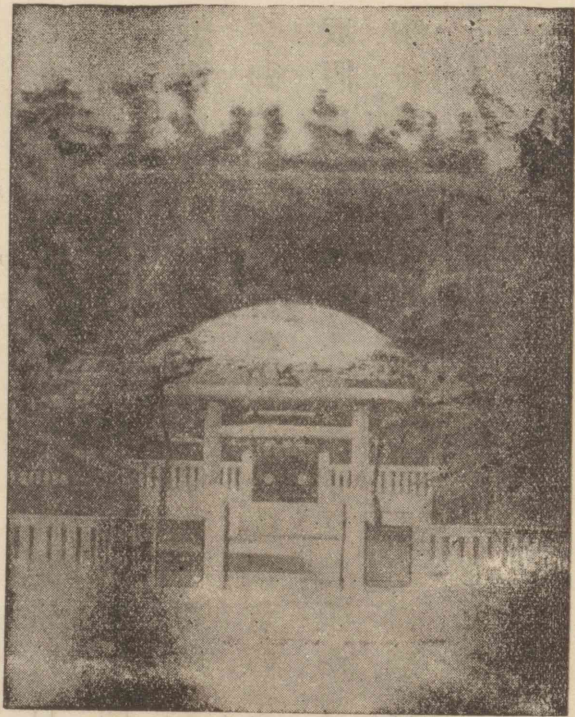
三七 明治天皇の御遺物を拜すその二

この御部屋の拜觀が終つて、更に別室の拜觀を許されました。この御部屋には、先帝の御學問所で御使用になつた御遺物全部、そのままに据置かれてございます。これは今上天皇陛下の大御心に出でさせられた趣に拜承致しました。構造も、方向も、廣さも、御學問所と全く同一であつて、すべての御遺物も、昨年七月十三日、即ち先帝最後の出御當時のまゝに、お備附になつてございました。床の間にはその當時の御軸物が掛けてあり、その前方には、御劔數振横たはり、御机は中央に南面してございます。先帝御在世の折は、我等如き者が御机に接近するなどは、思ひも寄らぬ事でございますが、

仔細に

修理
儉徳の至

今回は特にお許を蒙つて、仔細に拜観する光榮を得ました。まづ御机は羅紗を鏡張にしたテーブルで、中程に焼痕がございます。これは先帝が御煙草を召上つていらせられた節、臣下より政務を言上致しましたところ、先帝にはお吸ひかけの御煙草をテーブルの上の或物に横たへて、御熱心に御聴取あらせられた折、煙草が落ちてこの焼痕がついたのだと申すこととございます。さてこの焼痕のあるテーブルの羅紗をお取換へ申し上げんが爲、侍臣より幾度か願ひ出でましたけれども、斷じてお許がなかつたとの御事。蓋し何物でもそれにて事足る以上は、修理さへお控へ遊ばされる御儉徳の至と拜察し奉ります。



伏見 桃山 御陵

御硯箱は、明治二十年に鹿兒島縣からお取寄せになつた竹製の品でございます。その中の筆は普通のお品で、我等臣下の日常用ひる物と變らないのみならず、毛尖は禿び、軸の文字は見えないほどにお使ひふるしに成り、墨も亦同様で、一寸ぐらゐに磨りへらされた品もございました。鉢も同じく普通市場にある品で、その傍に、

慙愧に堪へず

學校生徒等の用ひる普通のインキがございました。最初は、侍従の方が何かの調に用ひたまふ、そこに置忘れたのであらうと存じましたが、やはり先帝の日常お用ひになつたものだと承つて、今更ながら御儉徳の高きに感激し、自ら願て慙愧に堪へなかつた次第でございます。

御椅子の下に獅子の毛皮が敷いてございます。これは赤坂假皇居において遊ばされた頃から長く御使用になつた物で、毛も次第に磨切れ、皮も遂に破れるやうになりました。そこでお取換を願ひ出でましたが、なに、宜しい。とて、お許がない。せめて御修理をと願ひ出て、漸くお許を得た。しかし適當の皮がない事を言上致しましたところ、何の皮でも宜し

上奏
裁可
主務者

隨時

いとのお思召であつたので、赤犬の皮で補足したと申すことで、侍従が、この邊が犬の皮です。と説明して居られました。

その傍にホワイト・シャツを入れる白いボール箱や、うの物が澤山積重ねてございましたから、何に遊ばす物か。と侍従に尋ねましたところ、やはりシャツの空箱であるが、書類を入れるに便利であるとして、御手許に留めおかせられたのであるとの事でございました。

大臣方より上奏御裁可を願ふ書類は、紙袋に入れ、表に主務者の名を署して奉るのださうですが、御親裁の後は、別の紙袋に入れてお下げになる。そして御不用になつた前の紙袋は、一枚たりともお棄て遊ばされず、隨時御詠出の御製を

詠草
御歌所
用ひるにそ
の途を以て
す

お認めになる御詠草にお用ひになりました。それをお側の方が別紙に拜寫して、御歌所にお廻し申したのでございませ。實に天下の物は用ひるにその途を以てすれば、一として無用の物はない。先帝はかく萬機の政を聞き召されながら、一枚の反故をも棄てさせられず、廢物を御利用遊ばされたのでございしました。

冗費

一天萬乗の君

又傳へ承るに、先帝が皇室費豫算を御親裁遊ばされる節は、詳細に御覽になり、祖宗の祭祀及び慈善に關する費目の外は、務めて御節約相成り、聊かにも冗費をばお省き遊ばされたと申す事でございます。

一天萬乗の大君におはしましながら、禿びた御筆をお用ひになり、破れた敷皮をお下げにならぬといふのは、いかなる思召でいらせられませうか。皆これ、節すべきを節して、有用の事にのみお用ひ遊ばさうといふ大御心に外ならぬ事と存じます。

さてお次の間には、造花や、彫刻や、種々な物品が備へてございしました。これを拜見致しまするに、學校や展覽會等に行幸の節、御獎勵のためお持歸りになり、又はお買上にならせられた物で、御裝飾のお目的とは考へられませぬ。それ故に、造花の如きも格別の物でなく、何年前の物か色も褪めはてて、殆ど裝飾の用を爲さぬ物まで、そのまゝになつてございませぬ。その他、美術工藝品のお買上も、皆御獎勵の爲で、俗人の

趣を異にす

道樂とは全く趣を異にしていらせられます。御製に

千よろづの民と偕にも樂しむに

ます樂みはあらじとぞ思ふ

とございますが、實にこのやうなお樂みを求めさせられんがため、先帝には長い年月の間、大いなる御苦心を遊ばされたのでございます。

お心づくし
興隆々として
興る

今や我が國運は、先帝の長き御心づくしのお蔭を以て、隆隆として興り、我等は世界の一等國民となりました。願れば我等は長い間、聖天子御一人に、非常な御苦勞をお掛け申し上げましたのでございます。ここに御遺物拜觀の光榮を拜謝するに當り、更に

國民の力のかぎり盡すこそ

わが日の本のかためなりけれ

の御製をも同時に服膺して、公人としても、私人としても、力のあらん限りを盡し、以て「我が日の本のかため」のため、應分の貢獻をなし、御高恩の萬分の一に對へ奉らんことを誓ふ次第でございます。

— 巖手學事彙報 —

三八 明治神宮に詣でて

御紋章打つた大鳥居をくゞつて、砂利白い參道を進んで行く。道を挟む神木は全国各地からの獻上で、樹々の深い緑の色にも、國民が崇敬の心ばえは認められる。樓門を入つて

貢獻

そゝろに

神前に額づけば、そゝろに明治の大御世が心のうちに浮んで来る。

鳳輦

(一)明治元年九月二十日京都御發輦、十月十日江戸御着輦。

鳳輦しづく、と京都の御所をお立ちになり、東海道を江

戸へお下りになつたのは明治元年の秋であつた。やがて江

戸を東京と改稱して、ここに大日本帝國の首都は定まつた

のである。それから四十餘年の大御世、御稜威の光は日一

日と我が國の面目を改め、地位を高めて行つた。曩には列強

から齒牙にも掛けられなかつた帝國が、後には世界の一等

國と認められるやうになつたのは、實にこの天皇の御治績

ではないか。明治五年には學制を發布して普通教育を振興

せしめ給ひ、六年には徴兵の制を定め給うたので、家に不學

稜威

齒牙に掛く

振興せしむ

陋習

の子なく、全國皆兵といふ今日の有様になつたのである。數隻の小汽船があつたばかり、一哩の鐵道もなかつた日本は、明治の御治世に於て、世界各國への航路を通ずる大汽船會社を有することとなり、鐵道は内地だけでも八千四百哩以上になつた。かゝる交通運輸機關の發達は、即ち産業の増進、貿易の膨脹を語るもので、通信機關の進歩も亦著しい。これは廣く知識を世界に求めるといふ趣旨から、西洋の學術を輸入し、舊來の陋習を破つて、百般の事業を改善し、他の長を採り、我が短を補ふといふ努力が、絶えず行はれた結果である。

かくて明治二十二年には帝國憲法の發布があり、翌二十

立憲
國教の大本

三年には帝國議會の開會があつて、我が國は東洋唯一の立憲君主國となつた。教育勅語を以て國教の大本をお示しになつたのもこの年であつた。明治二十七八年、同三十七八年、兩度の戦役で、世界各國は確實に我が國民の教育、文化の程度を知り得たので、我が國に對する尊敬は次第に加つたのである。明治の初年と末年との比較は、眞に霄壤の差といふものであらう。外國人がこれを世界史上の不思議と言つたのも無理はない。

霄壤の差

千古不磨
萬世不易

帝國憲法は千古不磨の大典、教育勅語も萬世不易の經典、將來の國民はこれを讀む毎に、明治天皇を追想し奉り、明治の大御世を回顧するであらう。さうして帝國の首都東京を

照鑒

想ふとともに、東京に明治神宮のあることを思ふであらう。將來國家に何事があつても、明治天皇の御靈が常に東京に照鑒あつて、帝國を護らせ給ふことを考へれば、そこに非常な強みを覺え、安心を感ずるであらう。橿原神宮に參り、平安神宮に詣でる時よりも、更に大きい、強い別種な感想を起すに相違ない。こんな事を考へながら、本の參道を青山通へ出た。

政体
君主政体
立憲國
議會
皇族華族
貴族院
衆議院

女子新國文 卷一 終

通用字及び正字對照表

(註に其の主なるもののみを擧ぐ。本書には主として通用字を用ひたり。)

劍	剪	刃	函	滅	涼	準	况	決	冒	兔	免	佞	仍	兩	通用正	
劍	剪	刀	函	滅	涼	準	况	決	冒	兔	免	佞	仍	兩	通用正	
冤	墻	塚	場	噴	噐	唇	叙	収	厨	厨	卿	鄉	即	効	通用正	
冤	墻	塚	場	噴	噐	脣	叙	収	厨	厨	卿	鄉	即	効	通用正	
拔	拏	戲	懺	懺	慨	恒	往	稟	屏	并	帽	尅	寶	寇	通用正	
拔	拏	戲	懺	懺	慨	恆	往	稟	屏	并	帽	剋	寶	寇	通用正	
濱	温	水	殲	欸	概	桿	晋	昂	既	整	擣	攢	擯	插	通用正	
濱	温	冰	殲	欸	概	杆	晋	昂	既	整	擣	攢	擯	插	通用正	
盃	鼓	痴	畧	留	畫	瑣	玄	猫	猪	猿	熔	陰	潜	潤	通用正	
杯	鼓	癡	略	畧	畫	瑣	玄	猫	猪	猿	鎔	陰	潜	闊	通用正	
織	績	績	紀	穀	粘	籤	篡	節	竽	窃	秘	頤	穎	研	通用正	
織	績	績	紀	穀	黏	籤	篡	節	竽	竊	秘	頤	穎	研	通用正	
厠	勅	冲	徇	俟	京	亡	並	万	豚	聿	耻	羹	群	罰	纏	通用正
厠	敕	冲	徇	埃	京	亾	並	萬	豚	聿	恥	羹	羣	罰	纏	通用正
婚	姊	妍	妊	野	坂	嚙	叶	厮	莽	艷	館	舖	阜	致	腸	通用正
婚	姊	妍	妊	埜	阪	齧	協	厮	莽	艷	館	舖	阜	致	腸	通用正
考	慙	富	忘	庵	嶋	峯	峩	岳	記	解	霸	褒	衛	蔭	萌	通用正
攷	慙	富	忘	菴	島	峰	峨	嶽	記	解	霸	褒	衛	蔭	萌	通用正
概	槁	楫	棕	基	案	柿	村	普	軟	贗	贊	賓	象	讎	讖	通用正
槩	槁	楫	棕	基	案	柿	村	普	軟	贗	贊	賓	象	讎	讖	通用正
砧	睹	狸	貉	無	烟	汗	昆	朴	馱	隸	隙	間	鎖	隣	輒	通用正
砧	覩	狸	貉	无	煙	汚	毗	樸	馱	隸	隙	間	鎖	鄰	輒	通用正
縹	綫	網	紅	紉	粽	筍	競	稿								通用正
縹	綫	網	紅	紉	糉	筍	競	藁								通用正

附錄

同字表 (いづれにて)

羈 羈 羈
船 船 船
花 華 衽 衽 谿 遁 雁 鴈
荒 荒 訛 譌 踪 蹤 錐 矛 雞 鷄
虱 蠹 譁 嘩 躡 躡 鏽 鏽 鏽 鏽
本來ハ異字ナレドモ同字若シクハ略字
トシテ往々混用セラル、モノ、
*標ヲ附シタル文字ニ限リ、慣用ニ從
ヒテ強ヒテ區別スルニ及バズ

巨 互

ワタル。「連互」
桓ニ同シ。

體 体

笨ニ同シ。アラシ、龐、粗。
カラダ。

但 但

タマシ、タマ。「但馬」
ツタナシ、拙劣。

僭 僭

ミダリガハシ、猥。
自分ヲ越エテオゴル。「僭越」

胃 胃

カプト、兜。「甲胃」
ヨツギ、嫡子。又子孫。「胃裔」

託 托

拓ニ同シ。オス、ヒラク。
ヨル、タノム、ユグヌ、カコツク。

擔 担

ハラフ。又アゲ。
ニナフ、カツグ。

改 改

鬼ヲ追フトイフ星ノ神。
アラタム。

鎗 槍

ヤリ。
鏘ニ同シ。鐘ノ聲ノ形容。

欠 欠

アクビ。「欠伸」
カク。「缺席」

糸 糸

ホソイト、細絲。
イト。

羨 羨

支那ノ地名。
ウラヤム。

協 協

カナフ、叶。
オビヤカス、脅。

刺 刺

サス。「刺殺。刺客。名刺」
モトル、ソムク、垂展。「亞刺比亞」

台 台

星ノ名。又敬意ヲ表スル爲ニ語ノ上ニ添フ。「台覽。台臨」
ウテナ、ダイ

后 後

ノチ、アト、ウシロ、シリヘ、オクル。
キミ。「皇后」

商 商

アキナヒ。
モト、本。

壺 壺

ツボ。
ミチ、宮中ノミチ。

姬 姬

ツ、シム。
ヒメ。

蟲 虫

魚介類ノ總稱。又マムシ。
ムシ。

訛 訛

ワビ、ワブ。「訛狀」
訛ニ同シ。アザムク。

詔 詔

ヘツラフ。
ウタガフ、疑。

証 證

アカシ、シルシ。「證明」
イサム、諫。

豐 豐

禮ノ古字。
ユタカ。

迄 迄

マデ。
ユク、行。

撰 選

エラブ。(ヨリトル)
エラブ。(書物ヲ編纂ス)

yukiko Kiyokang
yamanaka High
School

附 録

＊
シマ、隙
シリソク。「退卻」
キタフ。「鍛鍊」
シコロ「鑿」

宛 字 (左の如き字は假名を
使用するをよしとす)

おぼつかなし 覺束なし
かひ (證の意
の場合) 甲斐
きつと 屹度
さすが 流石、道
しまふ 仕舞ふ
せつかく 折角
だけ 丈
だめ 駄目
ちやうど 丁度
ちよつと 一寸、鳥渡

附 録 終

とうく
とかく
とて、とても
とにかく
なかく
ふるまひ
はかなし
ほんたう
むだ
むづかし
やたら
やはり

出鱈目
到頭
兎角、左右
迎
兎に角
中々、却々
振舞
果敢なし
本當
無駄
六ヶし
矢鱈
矢張

大正十二年十二月十日印
大正十二年十二月十三日發
大正十二年十二月十二日訂正再版印刷
大正十二年十二月十五日訂正再版發行

女子新國文典附

定 價		昭 和 時 代	
自卷一 至卷四 各金四拾貳錢	自卷一 至卷四 各金四拾貳錢	自卷一 至卷四 各金七拾壹錢	自卷一 至卷四 各金七拾壹錢
自卷五 至卷八 各金四拾錢	自卷五 至卷八 各金四拾錢	自卷五 至卷八 各金六拾八錢	自卷五 至卷八 各金六拾八錢



著 者 芳 賀 矢 一
發 行 所 兼 合 資 會 社
東 京 市 神 田 區 通 神 保 町 九 番 地
富 山 房
代 表 者 坂 本 嘉 治 馬
合 資 會 社 富 山 房 社 長
東 京 市 小 石 川 區 音 羽 町 七 丁 目 六 番 地
富 山 房 印 刷 所

發 行 所

東 京 市 神 田 區
通 神 保 町 九 番 地

合 資 會 社
富 山 房

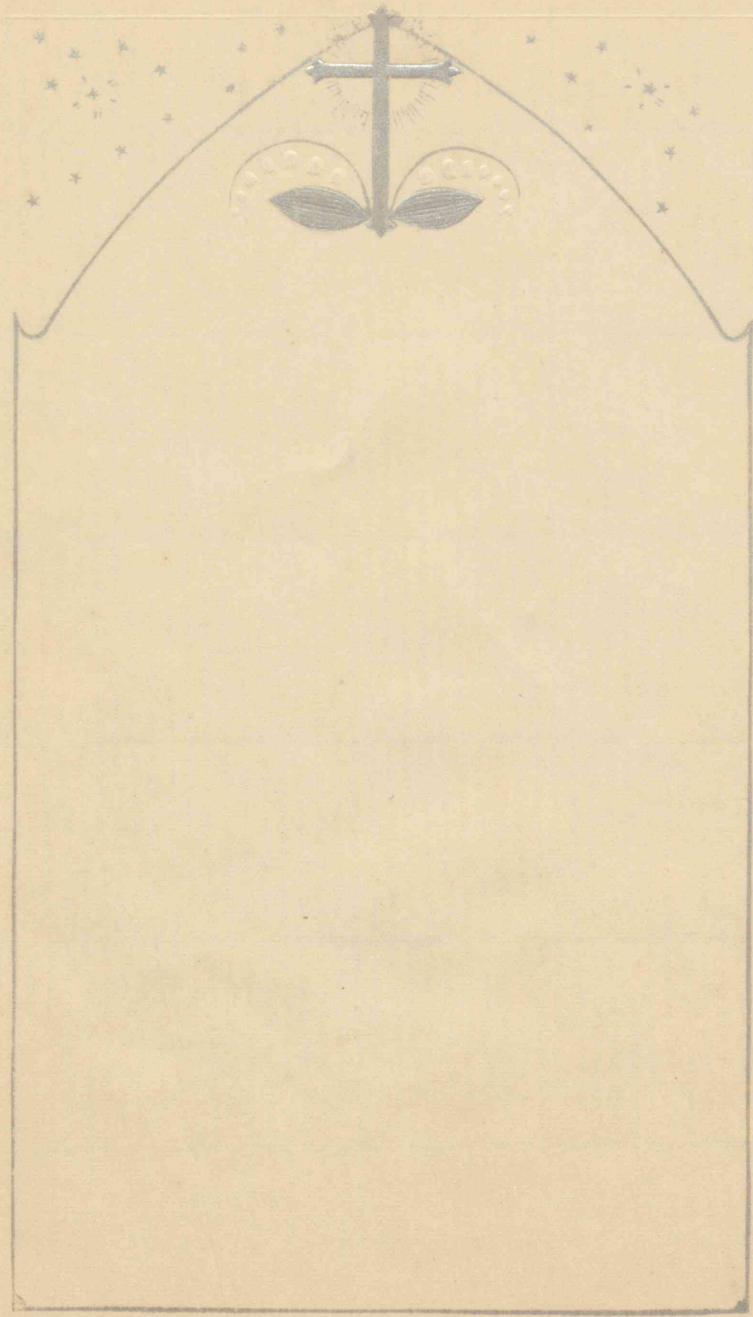
電 話 神 田 二 四 一、二 四 二、二 四 三
替 口 座 東 五 〇 一 番

第一編 第六組
清金七十五

広島大学図書

2000065461





燒痕 總核 剝齒 木牙 積歲 大培 身 瞬 精

一十月五日 吳遠足

二午前七時 廣島驛集合

三午後四時十分 廣島驛着

一A

清金工

